ハオト

作・小野寺　丈

「ハオト」

作　小野寺　丈

〈あらすじ〉

太平洋戦争末期、東京の都心からほんの少し離れた場所に、とても不思議な施設があった。そこは、まるで収容所のように、高く分厚い壁に遮断され、世間からマトモだと思われていない人達が収容され始めて、いつしか精神病院と呼ばれるようになった。

普通、それだけでは不思議な場所とは呼ばれないだろう。何故、そこまで稀有な印象になったかというと、理由は幾つかある。

どれだけ激しい米軍の空襲があっても、その場所だけは綺麗に避ける。そして、大日本帝国の陸海両軍の上官たちが顔を出すようになり、そこは、日本の命運を握るほどの最重要拠点となっていたからだ。

それほどの重責を担う施設になったのは、ひとえにそこに入院する患者たちに起因する。当時、各国で競っていた、原子力爆弾開発の、日本で唯一の権威である荒俣博士が運ばれてきた。理由は解離性同一性障害。所謂、多重人格の症状で、原爆の開発が停止してしまったのだ。元の人格に戻さない限り、日本国がその兵器を手にすることが叶わなくなった。

他には、自らを「閣下」と名乗る男も、日本軍は重宝していた。この男の大仰な演説は、その後に起こる戦局を言い当てるものだった。上官たちはこの男の予知とも言える戯言で戦略を練るようになっていた。

海軍少将である蓬の元に突然訪ねて来た、ハワイ生まれの日系二世、津田恭介も稀有な存在であった。ハワイに家族を残しているのに、自ら二重スパイを志願してきたのだ。

誰も疑う者がいない、この病院が最も諜報活動の打電には適していると、この男も入所することとなった。

もう一人、可憐な「藍」という名の女性は、白い伝書鳩を可愛がっていた。鳩と共にその足に巻く手紙を飛ばし、誰かと文通していたのだ。そこまで聞けば何処にでもある話だが、唯一首を傾げる事は、その相手というのが、21世紀に生きている男性だと彼女が信じている事だ。

婦長を始めとする医療スタッフは、こんな人々を優しく包み込んでいた。

そんななか、唯一、軍人でありながら入院したのが、水越という男だ。元々、海軍兵学校

のエリートで蓬海軍少将と同期だった。
当時の日本では尋常なことが、水越には異常に映り、どうしても耐え難いことだった。
彼の溺愛する弟が特攻に志願した事も少なからず、水越の心を閉ざす要因となっていた。
しかし、親友の蓬は、彼の弟が計器の故障で生きていることを告げ、彼と会わすことにした。その出来事が、水越の心の歯車を大きく狂わせていくのだった。
その蓬少将は、瀕死の日本を何とかすべく、その病院で次々と命令を下していく。
原子爆弾開発のために、イタリアから施術機器を取り寄せ、荒俣博士の多重人格障害の治療を急がせた。
そして、陸軍中将の森本に瓜二つの精神障害の男が運ばれてきて、なんとその男に森本の影武者として、ソ連大使との和平交渉の席に着かすことまで計画したのだ。
しかし一方、津田の調査で送り込まれた、彼の親友であった田中という男が、蓬が志す道とは相反する行動にでるのだった。
そこでの日常は至って陽気にのんびりとしていたが、日本の現状を打開するために動き始めたことが、戦局同様にその場所にも、徐々に鬱々とした影が立ち込め始めるのだった。

登場人物

水越義和（みなこしよしかず）　元海軍大尉・患者
蓬　荘七（よもぎそうしち）　海軍少将
貝瀬美智子（かいせみちこ）　看護婦長
自称・閣下（かっか）　患者
荒俣芳雄（あらまたよしお）　理化学研究所博士・患者
真行寺藍（しんぎょうじあい）　患者
津田恭介（つだきょうすけ）　日系二世諜報員・患者
田中秀明（たなかひであき）　日系二世特殊部隊　・患者
梶谷幸吉（かじたにこうきち）　医療スタッフ・雑務
真関智世（ませきともよ）　看護婦
カバロスキー政孝（まさたか）　日系ロシア人・ソ連外交官
菅沼守（すがぬまもる）　陸軍二等兵
水越正和（みなこしまさかず）　水越の弟・特攻隊員
佐藤光輝（さとうみつき）　刑事（現代）
大久保昭（おおくぼあきら）　海軍二等兵

老人

森本松太郎（もりもとまつたろう）　陸軍中将
鈴木くん（すずき）

1　プロローグ　二〇二〇年　取調室

静寂の中、老人の声が聞こえる。

老人　あの・・・、すみません。刑事課の方を、どなたか呼んで頂けませんか？逮捕してもらいたい・・・、私を、裁いて欲しいんだ。私は・・・

老人の顔が見える。

老人　人を殺しました。

刑事・佐藤光輝の顔が見える。

刑事　こんにちは。
老人　ああ…。貴方が担当？
刑事　はい。佐藤と申します。
老人　どうも。
刑事　失礼ですが、お名前は？
老人　わしか？
刑事　ええ。
老人　爺でいいよ。
刑事　ジジイって…。
老人　名前なんて、どうだっていい。
刑事　そういうわけにはいきませんって。
老人　それにしても、ドラマと、あまり変わらんな。
刑事　殺風景でしょ。
老人　いいな。自白したくなるな。
刑事　それで、どうされたんですか？
老人　カツ丼は出んのか。そのつもりで、朝、抜いてきた。
刑事　時間が長くなりそうなら考えます。
老人　おう。楽しみだ。
刑事　：で、本当に貴方が、殺害を…。
老人　・・・ああ。

刑事　それは、いつ頃？
老人　かれこれ、七五年は経つかな。
刑事　そうですか、七…七五年！？
老人　太平洋戦争も末期の頃だ。この東京に、ある施設があったんだ。
一見、普通の病院だが、これほど特殊な場所はなかった・・・。

2　病院内・広間

１９４５年３月１０日
雀色時。
現代で言うとプレイルームのような、患者たちが寛ぐために集まる広間である。
薬などを配る看護士の詰め所もあり、その隣には大きな窓があり、そこから日が射し込み、中庭が見えている。

元海軍大尉で現在この病院の患者である水越義和、医療班の梶谷幸吉が花札をしている。
机の上には、水越の赤い財布が置いてある。
別の机では、患者の真行寺藍が手紙を書いている。
患者で、自称・閣下も真行寺藍の席に座り、時折、藍と話している。
薬を配る、看護婦の詰め所の近くに院内警護担当の陸軍二等兵の菅沼守も立っている。

水越　来い来い来い来い！　ああ、畜生！
梶谷　やっぱりついてない、水越さん。
水越　梶さんについてないなんて言われたら、俺も終わりだ。
梶谷　私はついてますよ、ほら…あれ？
水越　なあ、他人のこと言えない。

閣下が突然大声で。

閣下　もはやドイツ軍も降伏の道を歩まなければならないのである！
藍　上手ですよ、閣下。
水越　始まったよ。

梶谷　今日、確か森本中将が来る日じゃなかったかな？
水越　そうか。久しぶりだな。
閣下　かのヒトラー総統も最後は自決をせざるをえなくなるであろう。
水越　ヒトラーが自決？　本当かよ。
梶谷　閣下の言うことは、ほとんど当たるらしいよ。
水越　だから、森本の野郎、真剣に聞いてんだ。ヘッ、馬鹿らしい。
　　こんな狂人の戯言で戦略を練るなんて、なぁ、守ちゃん。
菅沼　森本中将のことで、僕が相槌うてるわけありません。
水越　固いよな、相変わらず、守ちゃんは。
菅沼　仕方ありません。
水越　大変だな、君も。毎日立ちっぱなしで。
菅沼　仕事ですから。
梶谷　菅沼君は陸軍なのに戦地には行かないの？
菅沼　ちょっと訳があって、それでここに。
梶谷　色々あるんだ。
菅沼　はい。
水越　軍なんて辞めちゃえばいいのに。
菅沼　なんて事言うんですか。

　　すると、外からハオトが聞こえてくる。

藍　あ、帰って来た。

　　菅沼も藍を注視する。
　　藍、窓へ行き、開け、鳩の出入りが自由な鳥籠を外から
　　持ちあげると、中に白い伝書鳩がいる。

藍　お帰り。

　　頬笑みながら、鳥籠を持ち、部屋の方へ帰る。

水越　あれ、伝書鳩だろ？　ずっと文通してるな、藍ちゃん。
梶谷　誰とやり取りしてるんだろう。

　　水越はおもむろに親指を翳しながら、ニタニタと菅沼に
　　こう告げた。

水越　これに決まってるんじゃないか。
梶谷　色気づく年頃なんだよ、彼女も。
菅沼　藍さんに限ってそんな事はありません。
梶谷　何、ムキになっちゃって。
菅沼　そんなふしだらな方ではないと言っているのです。
水越　はいはいはい、守ちゃん。花札でも一緒にやろうか。
菅沼　あの…水越さん、今まで黙ってましたが、いい機会ですので言わせてもらいます。自分は女ではないので、守ちゃんと呼ぶのはおやめ下さい！
水越　わかった、わかった…では、菅沼ちゃん。
菅沼　一緒です！

すると、新人看護婦の真関智世がパラシュートを持って駆け込んで来る。

真関　梶さん！
梶谷　どうした？
真関　中庭の掃除、自分でやるって言ったのに、まだしてませんね。
梶谷　あ、わかっちゃった？
真関　わかりますよ。だって、こんな物が落ちてたんですから。
梶谷　何これ？
水越　パラシュートじゃないか？
梶谷　パラ？…。
水越　落下傘だよ。…日本製じゃないな。
菅沼　先程、米軍の偵察機が、付近で墜落したと報告がありました。
梶谷　これ、米軍の？
菅沼　本日、森本中将がいらっしゃる予定ですから…。
真関　私が伝えます。
水越　考えても仕方ない、さぁ、梶さん、続きやろう。
真関　もう止めて下さい、水越さん。また婦長に怒られますよ。
水越　知ったこっちゃない、あんな、ババァ。
真関　なんて事言うんですか！
梶谷　私も婦長に怒られたくないよ。代りに、閣下。
閣下　頭が高〜い！
梶谷　ハッ、閣下！こちらへ！。

自分の座っていた椅子を、閣下に渡す。

閣下　それで、よろしい。

真関　もう賭け事は止めましょうよ。知りませんよ。婦長はいつも突然現れますから。

貝瀬美智子婦長がー。

婦長　突然、現れます。

真関　ふ、婦長！

婦長　何ですか！この有り様は！

真関　申し訳ありません！

婦長　梶さん。

梶谷　何でしょう？

婦長　こんな所で、何をしていたのです？

梶谷　あの・・・。

婦長　まさか、こんな男と、ここで？

水越　へっ、いいじゃねぇか、これくらい。

婦長　梶さん、貴方も…。

梶谷　私は、賭け事なんか…。

婦長　じゃあ、閣下しかいないじゃないの。

閣下　ん？：貴様、女のくせに何だその態度は！？

婦長　（敬礼をする）本当に閣下が花札をやっておられたのでしょうか！？

閣下　おう。猪鹿蝶、赤たん、青たん、何でもござれだ。

梶谷　やった…。

婦長　梶さん。

梶谷　はい！

婦長　貴方は、この病院の医師でしょ？

梶谷　もちろんです。

婦長　森本中将がお見えになるまで閣下を部屋に閉じ込めておきなさい。

梶谷　あ、はい。

梶谷、無理やり、閣下の手を引っ張ると―。

閣下　無礼者！何をする！
梶谷　失礼しました、閣下。どうぞ、こちらへ。

梶谷、閣下を部屋へ誘導する。
婦長、机の上の赤い財布を持ち、中を見て―。

婦長　一円五〇銭、いつ、こんなお金を仕入れたのですか？
水越　あんたにぁ関係ない。
婦長　…没収します。
水越　ちょっと待てよ。
婦長　没収よ！
水越　金はいいけどよ…財布は…。
婦長　これが、何か？
水越　おふくろの形見なんだ。
婦長　……関係ありません。没収します！
水越　ふざけんなよ！
婦長　さぁ、夕ご飯を食べましょう。真関さん、仕度は済んでいるわね。
真関　はい、食堂の方に。

菅沼以外、ぞろぞろと向かう。

◎中庭

蓬荘七海軍少将が、目隠しに後ろ手を縛られた津田恭介を連れて来る。
蓬が津田の目隠しを剥ぎ、後ろ手を解く。

蓬　貴様、ここが何処かわかるか？
津田　…捕虜収容所ですか？
蓬　まぁ、態のいい収容所だ。
津田　・・・。
蓬　貴様が怪我で入院中だと、敵国に伝えた場所だ。そのおかげで、ここは戦火を逃れた。そして、高尾の山に落下傘も見つけた。貴様が言った通り、そこへ降り立った証拠だ。…ひとまず、貴様を信じる事にしよう。

津田　！・・・・。
蓬　命拾いしたな。
津田　・・・ありがとうございます。
蓬　今まで通り鬼畜米英の諜報員として、諜報活動を続ける。向こうの情報を聞き出し、我が日本軍のある程度の事実を伝え、ここぞという時に虚偽の情報を渡して米国を混乱させる。貴様が懇願した提案だ。本当にやるのだな。
津田　もちろん、日本のために二重スパイをしようと、貴方を訪ねたわけですから。
蓬　念のために言っておくが、本来なら貴様は、米国側の諜報活動という重罪を犯した身。収容所に入る前に、自白強要の拷問を受け、最悪の場合、反逆罪で極刑である。それはわかっているな。
津田　はい…。
蓬　我々を、この大日本帝国を裏切った瞬間に、貴様には今話した事が待っているのだ。それだけは忘れるな。
津田　わかっております。
蓬　貴様の祖国は、大日本帝国か、ハワイか、どっちだ。
津田　日本です。
蓬　両親がまだハワイにいてもか？
津田　両親を一日も早く祖国に帰すために、私は決断したわけですから。
蓬　貴様の働き次第では、いずれそういう日が訪れるかもしれない。
津田　はい。
蓬　・・・・・。
津田　あの…。
蓬　どうした？
津田　あの収容所で、諜報活動など出来るでしょうか？
蓬　実は、ここは精神病院だ。
津田　え？・・・。
蓬　軍の施設や収容所に比べたら、民間病院は絶好の隠れ蓑になる。それに、中には気が触れた者ばかりだ。多少の事をしても気付かれる心配はないだろう。
あと…この場所は、日本軍にとって重要機密施設になりつつあるんだ。軍の兵士が、中にも外にも目を光らせている。へたな収容所なんかよりもだ。脱走しようとしても、逃げ切れる可能性はまずないだろう。

津田　・・・・・・。
蓬　いいか、ここでは精神病患者の振りをしろ。
津田　振り…ですか？
蓬　そうだ。貴様は、患者としてここにいるからだ。

蓬、歩き始める。後を追う、津田。

津田　・・・・。

◎広間

菅沼が一人立っている。
そこへ森本松太郎陸軍中将が現れる。
菅沼、森本を見るなり、敬礼。

森本　おい。皆はどうした？
菅沼　ハッ！食事中であります！
森本　みんな、呼んできてくれ。
菅沼　ハッ！

菅沼、奥へ引っ込む。
婦長と梶谷が駆け込んでくる。

婦長　すみません、森本中将。閣下を呼べば宜しいでしょうか？
森本　荒俣博士はどうした？
婦長　今、来るかと。

荒俣、現れる。

荒俣　あら、モーリー。元気だった？　久しぶりに私を指名？
森本　じゃあ、今晩も激しく、Kiss me please.
婦長　なんだ、こいつ。初めて見る人格だぞ。
米軍御用達の娼婦で、アラマッタン・ハカーセと自分では名乗っております。
森本　アラマッタン・ハカーセだと。
婦長　はい。

森本　増えてるじゃないか、人格が。
婦長　はい、増殖中です。
…何とかならんのか。戦況も切迫していて、この博士が頼りなんだ。
婦長　特殊爆弾ですね。
森本　そうだ。その製造方法は、この博士しか知らないのだ。
それは、大日本帝国にとって、起死回生のものになるかもしれん。
婦長　重々承知致しております。
森本　だから、何とか、元の博士の人格を呼び戻して欲しいんだ。
婦長　あらゆる可能性を模索して、対処致します。
森本　また、その言葉か。
梶谷　多重人格の治療法は確立しておらず、私共もどうしていいものかと。
婦長　実は、荒俣博士の治療に、一つだけ切り札が…。
森本　切り札？
婦長　はい。
森本　なぜ早くそれをせんのだ？
婦長　心身に影響を及ぼしかねないので、躊躇致しておりました。
森本　荒俣の将来がどうなろうと、我々大日本帝国には特殊爆弾の製造が不可欠なのだ。奴の人格を取り戻すためなら、どんな方法もでいい。今すぐやれ！
梶谷　周到な準備が必要です。それと治療には特殊機械が必要で、それを何処で取寄せればよいのか調べなければなりません。しばし、お待ちを。

菅沼が戻ってくる。

森本　博士の治療のためなら、軍は幾らでも用意する。なるべく、急ぐんだ。
婦長　かしこまりました。
森本　菅沼、閣下を呼んで来い。
菅沼　ハッ！

そこへ、真関がパラシュートを手にしながら―。

真関　あの、森本中将。こんな物が中庭に。

森本　これは、敵国の！？…これが庭にあったのか！？
真関　はい！

そこへ閣下を連れた菅沼が戻ってくる。

菅沼　森本中将！　先程、付近で敵の偵察機が落下したと報告が…。
森本　敷地内に敵が潜んでいるかもしれん。表の陸軍兵隊に、不審者を見たら、ただちに捕らえるよう伝えてくれ。
菅沼　ハッ！
森本　これはこれは、閣下。どうぞお座りになって下さい。
閣下　グハハハハハ！　貴様、また聞きたいのか！？
森本　お願い致します。
閣下　今日は何が聞きたいのだ！
森本　そうですねぇ、まず…関東軍のことから。

真関はお茶を入れ、森本に―。

閣下　関東軍か…。満州、特にシベリアとの国境地帯の軍備、軍員の増員を図るべーし！
森本　それは、急な事で…。
閣下　まだ慌てんでいい。数カ月後、痛い目に合うだろう。奴らは手の平を返したように、侵略をし始める。
森本　それは、ソ連の事ですか！？
閣下　そうじゃ！満州はいずれ消滅。中国は八路軍が勝利を収める。
森本　ま、満州消滅？八路軍勝利？
閣下　うかうかしている場合ではなーい！
森本　は…はい！
閣下　硫黄島に上陸した米軍はなかなか手強い。兵士、航空機の増強、特に東南西部にかけての防衛により、一層の強化を図らない限り、一週間後には玉砕するであろう。以上！

いつしか、蓬海軍少将が現れ、遠くで見ている
流石に閣下の言葉に、森本は放心状態となった。
閣下、立ち上がり、戻る。

森本　…。

蓬　今のが、噂の閣下ですか？…森本中将。
森本　おう…。これは海軍のおぼっちゃま。こりゃまた珍しい所で。
蓬　今までの森本中将の策略が、精神病患者の言葉だったとは…。
森本　百発百中で当たるんだ。無理もなかろう。
蓬　かの帝国陸軍の上官が気違いに振り回されていると、海軍でももっぱらの評判です。
森本　相変わらず減らず口の多いおぼっちゃまだ。
蓬　正気になったら、どうするんです？
森本　使い物にならなくなった者は、もういらん。
蓬　荒俣博士の話も聞きました。
森本　そうか。
蓬　マッチ箱一つ分の容量で軍艦一隻を壊滅させる事が出来る爆弾だそうで。
森本　原子の力を使うそうだ。海軍でも研究中じゃないのか。
蓬　はい。…荒俣博士は正気に戻るのでしょうか？
森本　わからん。これからだ。なぁ？
婦長　はい。
蓬　婦長でいらっしゃいますか？
婦長　そうですが…。
蓬　帝国海軍の蓬です。初めまして。
婦長　はぁ～…いい男。
森本　婦長！
婦長　あ、失礼致しました。
蓬　一人、患者を預けたいのですが、よろしいでしょうか？
婦長　別に構いませんが…。
蓬　入れ！

津田恭介が現れる。

森本　・・・。
蓬　名前は津田恭介と申します
婦長　…一見、マトモに見えますが…どんな症状ですか？
蓬　えっと…彼は…。
津田　私は米国の諜報員です。
蓬　つ、津田…。
津田　いつも通信機で信号を送っています。ツートン、ツートン、ツー

ツートン。

蓬　…。

津田はモールス信号を打つ真似を繰り返している。

婦長　症状は分かりました。

梶谷　解離性障害の一種ですね。

蓬は安堵の表情を浮かべている。

蓬　この男は、いつも通信機を触っていないと落ち着かないようなので…。

婦長　そうでしょうね。何か代わりの物を与えますか？

津田　持ってきています。

真関　準備万端ですね。

婦長　奥の部屋が空いているわね。

真関　そうです。津田さん、こちらです。

婦長と梶谷、真関で津田を連れて行く。

蓬　森本中将、お話が。

森本　何だ？

蓬　実は、一つ、ご相談がございます。

森本　言ってみろ。

蓬　上官は確か、ソ連外交官の方を御存知のはず。

森本　日系ロシア人の男性だな。それがどうした？

蓬　…ソ連に仲介してもらい、米英との和平の道を探りませんか？

森本　何！？

蓬　絶対国防圏のはずだったサイパン、テニアンを攻略され、制空圏も奪われ、我が大日本帝国は瀕死の状態。

森本　そんな事は無い！

蓬　硫黄島も時間の問題。そして次は沖縄です。

森本　・・・・・。

蓬　どんな状況か、森本中将も重々おわかりかと。

森本　何をぬかすか！

蓬　このままでは大和民族は絶滅します！

森本　例え本土決戦になったとしても、日本国民一億総玉砕の精神で

最後まで闘い抜く。これが帝国陸軍の考えだ。

去ろうとする。

蓬　森本中将！

森本、立ち止る。

蓬　この場所は、今日から海軍が仕切ります。

森本　何だと？

蓬　陸、海、両大臣の間で話し合いはついています。これがその命令書です。ご覧になりますか？

森本　…。

森本は無言で命令書を受け取り、一瞥してから蓬に突き返した。

蓬　監視役の陸軍の彼は、どうしますか？

森本　あいつは役立たずだ。貴様の好きなようにしろ。

森本は踵を返し、去って行った。

◎中庭

辺りは薄暗くなっている。

真関と津田が現れる。

真関　このように庭に出れますので、気分転換にいつでもどうぞ。

津田　分かりました。

真関　・・・。

津田は何かを想いながら遠くを見つめている。

そんな津田を真関は見つめている。

真関　津田さん、精神を病んでいるなんて、とても思えない。マトモだ

もの。

津田　え？…あ、トンツートンツー…。

真関　急におかしな振りしなくても。

津田　振りじゃありません！　本当におかしいんです。

真関　本当におかしい人はそんな事は言いませんよ。

津田　あ・・・。

真関　なんかね…、何がマトモで、何がおかしいのか、たまに分からなくなるんです。　だって、あの壁の向こうへ、一歩外に出たら…。

津田　…？

真関　向こうは、マトモだと思えますか？

津田　…え？

真関　…、あ、ごめんなさい。では、入りましょう…。

津田　僕は、もう少し、風に当たっています。

真関　もう遅いですし、一緒に戻りましょう。近くに敵機が墜落して、米兵がいるかもしれないって…。危険ですよ。

津田　米兵が？　…僕はここに残ります。

真関　でも…。

津田　大丈夫です。

真関　…夕ご飯もありますし、すぐ戻って来て下さいね。

津田　はい。

真関、去る。

津田　・・・。

そこへ、日系ハワイ人の田中秀明（通称・ヒデ）が現れ、津田を羽交い絞めにして、銃を津田の頬に当てる。

津田　！！

ヒデ　シッ…。

ヒデは津田の口を押さえる。ヒデは津田の顔を覗き込むと驚く。

ヒデ　恭介か？

津田　！！　ヒデか？　君だったのか？

墜落した米軍機に乗っていたのは？
ヒデ　お前こそ、どうしているんだ？まさか、お前がいるとは…。
津田　米軍機が墜落してから、日本兵が懸命に君を捜している。ここはマズイ。僕の部屋に行こう。

二人は、こそこそとその場を立ち去る。

◎広間

蓬がいる。そこへ水越が現れる。

水越　あれ？…蓬。
蓬　水越。久しぶりだな。お前の噂は聞いていたよ。
水越　何してんだよ、お前。
蓬　ここは、帝国海軍が出入りすることになった。
水越　本当かよ。
蓬　しかしな、いきなり海軍から逃げ出し、捕まったら気が狂った振りか。上手い事やったな。
水越　・・・・・。
蓬　普通なら、反逆罪だ。
水越　振り？…お前から見たら、マトモじゃないだろうよ。
蓬　どう見ても正気にしか見えないぞ。
水越　…戦争なんてまっぴらだ。何が天皇だ。何がお国の為だ。そんなもんの為に死にたかぁねえよ。俺は生きる。好きな事して生き抜いてやるんだよ。
蓬　…どうだ、おかしいか？
水越　かなりおかしい。だろ？…だけど、俺からしたら、お前ら軍人の方が、よっぽどおかしいよ。
蓬　変わったな、水越。海軍兵学校にいた頃は、お前の志に影響を受けたのに。
水越　・・・・・・。

そこへ、津田が現れる。

津田　失礼します…。
水越　誰？
蓬　新しい患者だ…津田恭介。
津田　初めまして。
水越　おう。よろしく。
津田　お願い致します。（蓬に）ちょっと、宜しいですか？
蓬　悪いが、外してくれるか？
水越　ああ。

水越がいなくなったのを確認して、田中が着ていた、
米軍のパイロット服を渡す。

蓬　これは！？

津田、蓬に耳打ちをする。

蓬　貴様の友人だと？
津田　はい。
蓬　呼んで来い。

津田、田中を連れて来る。

蓬　ここへ座れ。名前は？
ヒデ　田中秀明です。
蓬　たとえ貴様の友人だとしても、敵国の諜報員には違いない。
何しに来た？
ヒデ　津田が移送され、病院での諜報活動に米軍が疑念を持ち…。
蓬　それで、貴様が偵察に寄越されたと。
ヒデ　はい。先ず、本当に病院かどうかを、上空から…。
津田　偵察機の墜落は、アクシデントだそうです。
蓬　…何か、魂胆があるな。
ヒデ　いえ。
津田　彼は自分と同じ志を持っています。同じ役目を与えても、きっと
遂行出来るはずです。
蓬　一人で充分だ。
津田　蓬少将、お願いします。ハワイでただ一人の親友なんです。

蓬　菅沼、いるか！？

菅沼陸軍二等兵が入って来る。

菅沼　失礼します！

蓬　この男を拘束しろ。収容所行きだ。

菅沼　ハッ。

津田　蓬少将！

菅沼がヒデを捕らえ、連れて行こうとする。

ヒデ　蓬少将。自分をここに置いておいた方がいいですよ。

蓬　何故だ。

ヒデ　今晩、米軍が大規模な空襲を行い、この東京は焼け野原になる。津田は疑われています。そんな人間を米軍は助けるわけがありません。確実にここも火の海になるでしょう。但し、私が居なければの話ですが。

蓬　…菅沼、ここに独居房のような部屋はあるか？

菅沼　はい、ございますが。

蓬　朝まで、閉じ込めておけ。

津田　蓬少将。

蓬　こいつの言っている事が本当かどうか、様子をみる。

津田　・・・。

大久保二等兵が血相かいて駆け込んで来る。

大久保　只今、特高警察より、患者を預かって欲しいと。

蓬　患者？

続けて婦長と梶谷も同じく続く。

婦長　町を裸で叫びながら徘徊していたそうなんですよ。

蓬　そうか。

梶谷　それがですね！

婦長　驚くほど…。

そこへ、初老の男性が、浴衣を広げて飛行機のポーズで走り込んで来る。

鈴木くん　キ～ン、Ｂ２９だぁ～！

森本陸軍中将とソックリなのである。

蓬　も、森本中将！

鈴木くん　違うよ、鈴木くんだよ。

蓬　鈴木くん？！

鈴木くん　キ～ン、前方視界良好、攻撃準備よ～し、発射！ダダダダダ！

機関銃を撃つ姿で走ってゆく。

蓬　どうした？　何が起こった？　森本中将！

蓬はすっかり混乱して、追いかけていく。

婦長　違うんですよ。その人は、森本中将ではなく。

梶谷　そっくりな別人なんです！

見えなくなった蓬を皆で追い掛けてゆく。

津田とヒデ、菅沼だけが残る。

気付くと、夜は深まっている。

菅沼はヒデを連れて行こうとするとー、

津田　守君

菅沼　はい。

津田　彼と、少し話をさせてくれないか？

菅沼　しかし…。

津田　３分。…それだけでいいんだ。

菅沼　…分かりました。３分ですよ。

津田　ありがとう。

菅沼は気を使い、その場を外す。

それを確認して、話し始めようとする。

津田　なあ…。

ヒデ　気になっている事があるんだけど…。

津田　え？

ヒデ　恭介。お前さ、あの将校に、俺に同じ役目を与えても遂行するとか言ってたけど、役目って何だよ。

津田　いや…それは…。

ヒデ　お前、まさか、将校と組んで俺たちを裏切るような真似をするんじゃないだろうな？　日本人の血は流れているけど、俺たちの祖国は海の向こうだ。家族も友人も、皆、アメリカにいるんだ。

津田　ヒデ、俺も君に聞きたい事がある。最初から君は降り立つつもりだったんじゃないのか？　事故も、偶然じゃない。そうだろ？

ヒデ　・・・・。

津田　・・・・。

ヒデ　ああ、そうだ。どうして分かった。

津田　米軍は此処を攻撃しないと、君は言った。僕が知らせていないのに、なぜ米軍は君がこの施設にいると知っている？　それは最初から作戦だったからだ。墜落も意図的なんだろ？　何故、そんな事をする？

ヒデ　…。　では、正直に言おう・・・・。俺は、お前を殺しに来た。

津田　！…。

ヒデ　米軍はお前を疑っている。何か、不審な点を少しでも感じたら、抹殺しろという命令だ。米軍機を墜落させたのも、あえて騒動にすれば、お前からコンタクトを取りに来るだろう、と。

・・・ただ、誤算だったのは、対象者が、まさかお前とは…。

空襲警報と多数の米軍の爆撃機のプロペラ音が聞こえて来る。焼夷弾が落ちて来る音、爆発音も聞こえ始める。

田中　ほら。焼け野原だろ？　アメリカは俺に嘘をつかないんだよ。お前も正直に言ってくれ。…日本で何をしてる？

津田　何って…

田中は立ち上がり、背後から津田の耳元に囁く。

田中　二重スパイか？
津田　・・・。悪い、ヒデ。俺は、もう。

津田は戻ろうと立ち上がろうとするが、田中はそれを阻止し、後方から身体を巻き付き、首を腕で締め上げられ、苦しむ、津田。
津田の断末魔の叫びに、飛び込んで来る、菅沼や蓬たち。
米軍の空襲の音と共に、騒然となる院内。

3　二〇二〇年　取り調べ室

刑事　それほどの大空襲でも、病院は無事だったんですか？
老人　ああ、田中秀明の言った通り。
刑事　結局、そのヒデという青年は？
老人　大船にある、捕虜収容所に入れられた。
刑事　まぁ、そりゃあ、そうなりますね。
　　…それにしても、日本も原爆を開発しようとしていたなんて…。
老人　荒俣博士の人格さえ戻れば、造れるんだよ。
刑事　治療の切り札って言ってましたけど…それって？
老人　電気ショック療法だ。
刑事　電気ショック？
老人　一九三八年に、イタリアの何とかっていう人が、電気を用いて痙攣を起こす事に成功してな。脳のけいれんを誘発して、精神疾患によって障害を受けた脳の機能を回復させようとする治療法だ。日独伊の三国同盟はあったが、あの戦況下でイタリアから特殊治療機器を調達するのは至難の業だ。それでも、原爆開発で起死回生の逆転を狙っていた日本軍は強引に取り寄せたんじゃ。だけど、ただ一人、蓬少将だけは、和平工作にも非常に熱心に取り組んでいた。

4　広間

鳥のさえずる、朝を迎えると、日付が映し出される。

１９４５年４月８日。
机で一人、手紙を書いている藍。
奥から水越が、一升瓶を手に持って笑いながら酔っぱらって現れる。
看護婦詰め所に入り、マイクに向かい―。

水越　あーあー…聞こえますか？　皆さん。

奥から真関、梶谷、菅沼、閣下の声「ハーイ」。

水越　真関智世ちゃんの準備が出来たら呼んで下さい。
菅沼　ちょっと待ってて下さ～い！
水越　おっ…藍ちゃん、藍ちゃん！
藍　はい…何ですか？
水越　飲まない？
藍　私は結構です。
水越　また手紙を書いてるんだ？
藍　そうですよ。
水越　しかしなぁ…藍ちゃん見てると、何処がおかしいのかなぁ…って。
藍　私にもよくわかりません。
水越　だよねぇ。

藍、一度書いた手紙を気に入らなくて丸める。

水越　また書き直すんだ？
藍　はい。もっと伝えたいんです。…ここ（胸）にあるもの。
水越　ふ～ん、いつも伝書鳩で送ってるけど、何処の人なの？
藍　二〇二〇年の人です。
水越　そう、二千…はい!?
藍　二〇二〇年
水越　藍ちゃん、やっぱりおかしいわ。

閣下、梶谷、菅沼、津田が仮装して、顔や身体に変な落書きをしてあったり、楽しげにケラケラと笑いながら奥から駆けて来る。津田だけ、未だ覇気がない。

水越　お、似合ってるぞ、みんな。
津田　・・・。
水越　恭ちゃん…。分かるよ。友達にあんなことされてよ、傷つくのもさ。だけどよ、いつまでもクヨクヨしたって、何も変わんないんだから、今日くらい、浴びるほど呑んで忘れちまいなよ。
津田　そうですね…。
水越　お前を励ます会なんだぞ。ほら、呑んで。
津田　はい。

水越、津田に茶碗を持たし、日本酒の一升瓶でつぎ、それを一気に飲み干す、津田。
梶谷は真関の仮装を見に行く。

水越　どうだ。元気になったか!?
津田　はい！
水越　そうだ。その調子だ。
梶谷　凄い！真関ちゃん、凄いことになってる〜！
閣下　グハハハハハハ。
水越　見てぇな、早く。
梶谷　呼ぶよ。呼んじゃうよ。
藍　そろそろ婦長が来る時間じゃ…。
梶谷　休み。あんなオバちゃんは今日休み。
水越　あんな鬼ババアはいない方が。

そこへ真関も、鬼ババアを連想させるような凄い格好で現れる。

真関　いつまで待っても、呼んでくれないから出てきちゃいました！
水越　鬼ババァだ！　ババァ、ババァ！鬼ババァ！

婦長が出て来るが誰も気付かない。

真関　これ、イメージは婦長なんです。
水越　婦長だ、婦長！
一同　鬼ババァ！鬼ババァ！婦長は鬼ババァ！

婦長　・・・・・・。

一同も婦長に気付く。

一同　・・・・・。

真関　あの…。

婦長　鬼ババァです。

真関　お許し…

婦長　許しません！蓬少将がいらっしゃるので、急いで来たらこの有り様。水越さん、またあんたね。今度は飲酒…。

水越　うるせぇな。

婦長　何なの、その態度！

真関　すみません・津田さんがずっと元気なかったから、皆で盛り上がろうと言ったのは私です。私が全て悪いんです。

婦長　こんなことしている場合じゃないでしょ。昨日、運んでもらった例の治療機械。説明書読んで勉強したの？

真関　イタリア語だから、誰も読めません。

婦長　とにかく、まず閣下に試しなさい。

菅沼　まさか、電気ショックを…。

婦長　治療です。

菅沼　閣下は軍にとって重要人物です。そのような真似は…。

婦長　そんな格好で、何言われても説得力ありません。

菅沼　すみません。

婦長　自分を閣下と思いこんでいる多重人格者です。その症状が改善されれば、間違いなく荒俣博士にも効果があるはずです。だから、さっさと試しなさい。

真関　は、はい！

婦長　梶さん。

梶谷　はい。

婦長　貴方に任せていた荒俣博士、どうなっています？

梶谷　7人までの人格は把握出来たのですが…。

婦長　蓬少将が気にされてました。ちょっと連れてらっしゃい。

梶谷　はい。

真関、閣下、水越、津田、梶谷がこの場を離れる。

菅沼はいつもの定位置に直立で。

婦長、菅沼を見ている。

菅沼　・・・・・。
婦長　着替えてらっしゃい。
菅沼　すみません。

菅沼、着替えに向かう。
婦長、藍の元へ。

婦長　真行寺さん、また書いているの？
藍　はい。
婦長　未来に飛んで行くんでしょ？　その鳩。
藍　そうなんです。
婦長　相手の方、どうして未来の人だってわかるの？
藍　これから起こる事を色々と教えてくれるんです。
婦長　ふ～ん…日本の未来は明るいのかしら。
藍　ええ。希望ある未来のようです。少なくとも今よりは。
婦長　これ以上悪かったら、そこは地獄だわ。
藍　本当ですね。
婦長　お目に掛かってみたいわ、その方に。
藍　私もなんです。きっと、素敵な人だと思います。

梶谷が荒俣博士を連れて来る。

梶谷　連れて参りました。
荒俣　おう婦長！　久しぶりだな！元気だったかい！
婦長　これは、誰？
梶谷　これは、大工のはっつあんです。
婦長　はっつあん。
荒俣　へい。
婦長　最近、景気は如何？
荒俣　あんまり良くねぇなぁ…お？…（机に触れ）ガタピシいってやがる。今度、タダで直してやっから、いつでも言ってくれ。
婦長　ありがとう。
荒俣　おう婦長！久しぶりだな！元気だったかい！
婦長　え？

梶谷　変わりましたね。
婦長　これが？
梶谷　恐らく。
婦長　じゃあ、誰なの？
荒俣　あ！河岸に行って来るの忘れちまったぁ。
梶谷　魚屋のトメさんです。
婦長　はっつぁんと一緒じゃない。
梶谷　そうですね。
婦長　かなり演技力不足ね。
梶谷　そういう問題ではないと思います。
婦長　他にはどんな人格が？
梶谷　どんな人格がお好みですか？
婦長　そんな、選べるの？
梶谷　ええ。呼んだら出て来る時があって…。
婦長　そうなのね。それじゃあ…。
梶谷　笑える奴いきますか？
婦長　笑えるだなんて、そんな不謹慎でしょ。これは、ご病気なのよ。
梶谷　すみません。あの、昨日、新しい人格が現れて…。
婦長　ほう。
梶谷　彼女と離れ離れになった幸男。
婦長　幸男？
荒俣　はい。
婦長　あ、来た。…幸男さん？

荒俣は、幸男という人格で、一つ頷いてみせた。

婦長　彼女は今何処に？
荒俣　それが、シベリアと満州の国境沿いを歩いていると、いきなりロシア人に…。
婦長　連れて行かれたのですね？
荒俣　はい。
婦長　彼女のお名前は？
荒俣　カバ子
婦長　カバ：プッ（吹き出す）
梶谷　・・・。
婦長　笑ってないわよ。

荒俣　カバ子オォォォォォォォ！
婦長　アハハハハハ！
梶谷　爆笑じゃないですか。
婦長　もうダメ。可笑しくて…

婦長は梶谷を見ると、目が合い、急に襟を正す。

婦長　他には？
梶谷　他？
婦長　笑えるやつ。
梶谷　ええ!?
婦長　とっておきの。
梶谷　とっておきですか。じゃあ、黒人と離れ離れになった為五郎。
婦長　すごい設定ね。期待出来そうだわ。為五郎さん。
荒俣　あら、嫌だ。お呼びになったの？
婦長　女性なの!?
梶谷　はい。
婦長　シュール過ぎて笑えないわね。
梶谷　・・・。

すると、別部屋から突然爆発音がして、真関の尋常ではない悲鳴が聞こえる。
煙が立ち込め、徒ならぬ状況。
菅沼が顔は煤だらけで、髪の毛は焼けてチリチリとなった状態で現れ、よろよろと倒れ込んだ。

菅沼　・・・。
婦長　守君！
梶谷　大丈夫か？　しっかりしろ！

真関が駆け込んで来る。

真関　す、す、すみません！
婦長　何があったの？
真関　閣下に試そうとしたら、守君、自分が代りにと！ハ、ハ、ハンドルを目一杯右に回したら、突然火花が散って、それで。

婦長　高電流になったんじゃないの！？
真関　本当に申し訳ございません！
婦長　機械は壊れなかった？
真関　作動はしています。
婦長　良かったわ。兎に角、先ず閣下に試しなさい。それを分析するの。
　　本丸は荒俣博士なんだから。
真関　分かりました！

　　真関、真剣な眼差しで向かう。
　　荒俣が、煤けた黒い菅沼の顔を見て―。

荒俣　ボボ？
菅沼　？・・・・・。
荒俣　ボボよね？　私…私よ。
菅沼　為五郎。
婦長　奇跡よ！
荒俣　ボボでしょ？
婦長　合わせて、合わせて。
菅沼　え？
婦長　治療よ、これは。
菅沼　あ、はい…。ど、何処行っていたんだ為五郎。ずっと探してたんだぞ。
荒俣　私もよ…逢いたかった。
婦長　ちっとも笑えないわね。
梶谷　そこじゃないです、見るところ。

　　すると、施術室から、この世のものとは思えない、苦痛に満ちた閣下の悲鳴が聞こえて来る。
　　そして、その声に重なるように、真関の泣き叫び、閣下の名前を呼ぶ声が轟くー
　　何事かと、水越と津田も覗きに来る。

梶谷　どうした！？
婦長　何事なの！

　　泣き叫びながら、真関が現れる。

真関　閣下が、閣下が…。
婦長　真関さん、しっかりしなさい！
梶谷　何があったんだ、真関ちゃん！？
真関　ごめんなさい…ごめんなさい…。
婦長　今度はどうしたの!?
真関　もう、私、どうしたら…。

閣下、人が変わったように、オドオドと出て来る。

他一同　？……。
閣下　すみません。あの、ここは一体？
真関　閣下が、正気に…。
婦長　え！？治ったってこと？　良かったじゃないの。
真関　でも…。
梶谷　閣下？…閣下？
閣下　え？…僕のことでしょうか？
梶谷　はい。
閣下　何で、僕が閣下なんて…。
婦長　貴方、お名前は？
閣下　知りません。何も思い出せなくて、不安で不安で。
梶谷　今後の戦況とか戦略とか。
閣下　何ですか、それは？
婦長　貴方、何て事してくれたの！？
真関　だって、婦長が…やれって。
婦長　もうすぐ蓬少将がいらっしゃいます。
閣下　どなたです？
婦長　とにかく貴方は、閣下になって下さい。
　　こう、グハハハハハハって。頭が高〜いって…。
閣下　なんで、そんな恥ずかしいことをしなきゃいけなんですか？
梶谷　貴方がやってたんです！
婦長　ああ、もう。真関さん、どうしてくれるの！？
　　電流の度合いとか、ちゃんと考えた？
真関　申しわけありません！
水越　誰も触った事ない機械なんだから、仕方ないだろう！
婦長　こっちの話です！口出しするな！

水越　黙って聞いてりゃ、お前、言ってることがおかしいんだよ！
婦長　真関さん！ついでにこの人にも、電流流してやりなさい！
水越　ケッ！　胸くそ悪ぃな！

菅沼が駆け込んでくる。

菅沼　蓬海軍少将がいらっしゃいました！
婦長　閣下を急いで隠して！
菅沼　はい！　閣下、私に付いて来て下さい。

菅沼、そそくさと閣下を連れて行く
真関は狼狽しながら、とぼとぼと歩いてゆく。
真関を心配して、水越も後ろからついて行く。
蓬が、大久保二等兵を連れて、現れる。

蓬　お早うございます！
婦長　お、お早うございます。
梶谷　お早うございます。
蓬　今、中庭で荒俣博士に逢いました。お元気そうで…。
婦長　閣下は今、腹痛で寝込んでいます。
蓬　え？…。
婦長　あ、何ておっしゃいました？
蓬　荒俣博士。
婦長　ああ、最善を尽くしております。
蓬　そうですか…。ところで、いい案が思い浮かびまして。例の森本中将にそっくりな。
梶谷　鈴木くん。
蓬　はい。はっきり申しますと、その鈴木くんに、森本中将の影武者になってもらおうと。
婦長　影武者と申しますと？
蓬　影武者と言っても戦地に赴くわけではございません。和平交渉に一役買ってもらいたいのです。米英国と大日本帝国との仲介が出来る国は、もはやソビエト連邦しかありません。
そのソ連の外交官に私と一緒に会って貰いたいのです。
梶谷　森本中将を連れていらっしゃれば…。
蓬　あの方は、和平には反対です。だから、代わりが…。

婦長　ですが、まともに受け答えが出来るとは…。
蓬　二か月かけて教育して下さい。
婦長　どの程度まで…。
蓬　森本中将と寸分変わらぬ程…。なぜなら、その外交官は森本中将と面識があるからです。
梶谷　陸軍中将がその場にいなくても…。
蓬　そういうわけにはいかないのです。陸、海、双方の承諾が無ければ話を進められません。いいですか婦長、戦争を終わらせられるかどうかの瀬戸際なのです。命がけでお願いします。
婦長　…はい。
蓬　閣下を呼んで頂けますか？
婦長　はい！？　あ、今、閣下は腹痛で…。
蓬　…そうですか…。大丈夫なのですか？
婦長　あ…はい。
蓬　閣下は荒俣博士と双璧の、大日本帝国の命運を握る、最重要人物なのです。健康管理も含めて、大事に接して貰わないと困ります。
婦長　は、は、は…はい。か、閣下を診て参ります。

婦長、梶谷、閣下の元へ。

◎中庭

大久保　上官。
蓬　何だ。
大久保　ソ連の方には、誓約書のようなものを書かせるのでありますか！
蓬　まぁな、口約束では心配だからな。
大久保　その場合、拇印などは。
蓬　当然押す。
大久保　影武者ですと、指紋が…。
蓬　あ…。
大久保　どうされますか？
蓬　森本中将の…指切っちゃえ。
大久保　ええ!?
蓬　冗談だ。

真関がトボトボと歩いて来る。
そこへ、水越が。

水越　真関ちゃん。
真関　あ、水越さん。
水越　元気ないな。
真関　私、ダメです。失敗ばかりして。
水越　一度や二度の失敗、どうって事ねぇよ。俺なんか、でっかいの一回やってるから。
真関　そうなんですか？
水越　ああ。この日本、見てみろよ。歴史史上最大の失敗の真っ最中じゃねぇか。
真関　・・・・・。
水越　みんなそこから立ち直るもんだ。分かるか？　真関ちゃん。
真関　はい。
水越　元気になる御まじないしてやろうか。
真関　御まじないですか？
水越　そう。

水越、真関の肩をつかみ、そのおでこに軽く口づける。
真関、キョトンとした表情になる。

真関　…。
水越　気張ってな。

真関、ペコっと頭を下げ走りだし、立ち止り振り返り、もう一度お辞儀をして恥ずかしそうに去って行く。
それを、見送る水越。そこへ、蓬と菅沼がやって来る。

蓬　しかし優雅なもんだな。日本がこんなになってるのに…。
水越　俺には関係ない。
蓬　・・・・。
水越　・・・・。
蓬　水越。一つだけ聞いておきたい事があるんだが。
水越　何だ？

蓬　お前が軍から逃げ出した、本当の理由って何だ？
水越　やっぱり、その話か。
蓬　どうしても聞いておきたいんだ。
水越　うち、親父もおふくろも死んで…。結局、弟と二人暮らしだったじゃないか。
蓬　そうだったな。
水越　そんな弟に、国は無理やり特攻を志願させた。
蓬　無理やりじゃない。
水越　上官の言った事に逆らえないじゃないか。
蓬　・・・。
水越　だから、俺は猛反対した。
蓬　何故だ？
水越　死なせたくなかったんだ。…家族だから。俺の家族はあいつしかいない。
蓬　・・・・。
水越　親父は軍人でありながら平和主義者だったから、同胞に殺された。その哀しみが癒えたと思えば、次は弟だ。今度は、日本国に殺された。
恋仲になった女性も出来たと聞いたばかりだ。人生を謳歌しなければいけない若者が、国のためとはいえ何故死ななければならない。
あいつが旅立つ日、俺は何もかも嫌になって、何のために闘えばいいのか、さっぱりわからなくなった。それで、俺は…。
蓬　やはり、そうだったのか。
水越　蓬、お前は何のために闘っているんだ？
蓬　守るためだ。日本、…そして、家族を。自分は、ここに来る前、何百人という若き特攻隊員を見送ってきた。彼等は決して国のために死のうとしたわけじゃない。本音は、愛する者たちを守るためだ。父、母、兄弟、そして恋人を。
お前の弟、正和君だって、そんな思いで志願したんじゃないのか？
水越　・・・・・・。
蓬　水越。
水越　・・・・・・。
蓬　生きてるぞ…、お前の弟。
水越　何？

蓬　あの日、計器の故障で延期に…。
水越　ほ、本当か!?…おい、蓬、それは事実なのか!?
蓬　もう一つ、話がある…。
水越　・・・・・・。
蓬　正和君は、その後…お前の兄貴は戦闘を放棄した非国民だと…未だに罵られ続けているんだ。
水越　・・・・・・。

蓬、水越の顔も見ず、歩き始める。
菅沼、水越を見続ける。
遠くを見ている、水越。

5　二〇二〇年　取調室

老人　水越は、蓬の去り行く姿を一度も見ようとしなかったんじゃ。この時の水越の心情は、余程の事だったのだろう。あれほど元気だった男が、以来、人が変わったように覇気がなくなったそうなりますよね。唯一の家族が、自分のせいで…。
刑事　ああ。
老人　ところで…、いつ、殺害現場の話に行きつくんですか？
刑事　慌てるな。
老人　その為に、私、話に付き合っているので、そこだけは忘れないで下さいね。
刑事　つまらんのか、わしの話が。
老人　いえいえ。へたなドラマより、断然面白いです。ただ…、面白いだけで終わっちゃうような気がして。
刑事　何言ってるんだ。ここからだぞ。ここから盛り上がっていくんだから。
老人　はあ…。
刑事　君は、誰の話が一番興味深い？
老人　全員ユニークですけど、しいて言えば、荒俣博士かなあ。まさか、日本でも原爆を作ろうとしていたとは思ってもいなかったんで。
刑事　閣下の解離性障害は治ったと言っていいのだが、余りにも代償が大き過ぎたからな。
老人　そうですよね…。

6　広間

老人　それでも…、あ、その前に水越や閣下の話から始めようか…。

１９４５年５月１６日。日付が映し出される。
中庭の見える大きな窓から、夕日が差し込んでいる。
真関が机などを拭いている。

真関　水越さん。
水越　ああ、真関ちゃんか。
真関　どうしたんですか？ここの所、ずっと元気がない。
水越　うん、ちょっとね。
真関　らしくないですよ、水越さん。
水越　そうかな…。
真関　元気出して下さい、元気！今の日本だって、最大の失敗の真っ最中です。みんなそこから立ち直るんです。…あの、何でしたら、御まじないしましょうか。

振り返ると、水越はいない。

真関　あれ？水越さん？水越さぁ～ん！

真関、探しながら、去って行く。
そこへ、伝書鳩の入った箱を持ちながら、藍が現れる。
その箱を机の横に置き、手紙を書き始める。
そこへ、とぼとぼと閣下がやって来る。元の閣下の練習をしている。

閣下　ブハハハハ…ゲホッ…違うか。ブォハハハ…はぁ～
頭が高～い…ん？　図が高～い…違うか。
頭が高～、全然違う。

閣下、藍の視線に気付き。

閣下　あ、すみません。

藍　何度か、練習風景を見ていますけど…。
閣下　はい。
藍　どんどん様になってきていますよ。
閣下　本当ですか!?
藍　特に最後のなんか…。

最も甲高い声を発する。

閣下　頭が高〜い。
藍　完璧です。
閣下　これがですか!?
藍　もう、色々な人が色々な事を言うので、何がなんだか…。
閣下　今日、蓬中将がひと月振りにやって来るらしく…
藍　いよいよ、練習の成果を見せる時ですね。
閣下　そうなんですが、婦長にも脅されてまして。
藍　どんな事を？
閣下　正気に戻ったことがバレたら、生きて帰れないと…。
藍　え？
閣下　そんな事を言われたら、もうドキドキドキドキしっ放しで…。
藍　大丈夫。
閣下　そう思いたいのですが…吐きそうなうえ、漏れそうです。
藍　まあ…、閣下、大丈夫、大丈夫。
閣下　人ごとだから、そう言えるんです。命がけですよ。生きて帰れないかもしれないんですよ…オエ。
藍　しっかりして下さい。
閣下　ダメです。
藍　さっきのようにやれば、大丈夫、大丈夫。
閣下　ですけど、仮に閣下に見えたとしても、戦況や戦略までは…。
藍　はい、これ。
閣下　これは？
藍　今までも、ずっと渡していたんですよ。
閣下　私に？
藍　ええ、これをいつも丸暗記して…、覚えてませんか？
閣下　全然。
藍　ずっと私が伝えていたんです。
閣下　これって？

藍　これから起こる事です。
閣下　これから？
藍　文通している人は、未来の人だから。
閣下　はぁ…。
藍　これを言えば…大丈夫、大丈夫。
閣下　ありがとうございます。

藍は微笑みながら、頷いた。

閣下　しかし…、戦争って、嫌ですね。平和がいい。
藍　本当に…。
閣下　僕、練習してきます。
藍　頑張って下さい。

閣下、奥に去ると、藍は書き終わった手紙を手にして、
読み始める。そこに文面の藍の言葉がかぶってくる。

藍（ＮＡ）　今日は、一九四五年五月一六日。外では年中爆発音がして、本当に怖い。二〇二〇年の世界は、大変な病原菌との闘いだって聞いたけど、見えない敵も怖いね。　どんな戦争でも、本当に嫌だ。早く平和にならないかな？　早く自由になりたいよ。
でも、一番の私の希望は、貴方に逢うこと。七五年後の貴方と出逢うこと。でも長いよ、そんな先なんて…。逢いたい…。出来る事なら、今すぐ逢いたい…。

藍は手紙を白い鳩の足に巻き、窓から鳩を放つ動作。
ハオトを奏でながら、白鳩が遠くに飛んでいく。
そこへ、菅沼がやって来る。

菅沼　藍さん！
藍　あ、守君、何処へ行っていたの？
菅沼　中庭です。たまに見回らないと。
藍　そうなんだ。

菅沼、周囲を見回し

菅沼　ちょうど良かった。藍さん…実は…。

ポケットからプレゼントを出し、渡す。

藍　なぁに、これ？

菅沼　休みの時にコツコツ造って。

中を開けると、真っ赤な花のブローチが―。

藍　うあぁ、綺麗…。

菅沼　胸にでも付けて下さい。

藍　ありがとう。

菅沼　はい…。あの…今…また鳩を？

藍　そうなの？

菅沼　最初はどちらが先に？

藍　私からよ。

菅沼　知り合いの方なんですか？

藍　逢った事ないの。…だって、二〇二〇年。

菅沼　ああ、そうでしたね。

藍　最初…「誰か、私を見つけて下さい」って、その一言を書いて、鳩を飛ばしたの。そうしたら、見つけてもらえた。

菅沼　「誰か、私を見つけて下さい」…。

藍　そう、「誰か、私を見つけて下さい」…。

菅沼　「誰か、私を見つけて下さい」…いい言葉だあ～。藍さん、ぼ、僕を見つけて下さい！

藍　・・・。

藍は悪気無く、菅沼から目を逸らし、鳩が飛び去った方角へ目を向ける。

菅沼　ちょ、ちょ、ちょっと！藍さん！藍さん！

藍　なぁに。

菅沼　その文通の相手は、女の人ですか！？

それとも・・・女の人ですか！？

藍　男の人。

菅沼　やっぱり…。

藍は、去る。
そこへ、婦長と梶谷がやって来る。荒俣博士を連れて。

婦長　…という事は、鈴木君は五段階目まできているわけですね、梶さん。
梶谷　はい。真関さんの頑張りで、何とか。
婦長　あとは、荒俣博士ね。治療はいつにする？
梶谷　解離性障害の治療によって、閣下の記憶が全て喪失した事を考えると、慎重にならざるを得ません。
婦長　そうね…。

そこへ、真関が駆け込んで来る。

真関　すみません！
婦長　何処行ってたの！？

蓬が現れる。

蓬　婦長。
婦長　蓬少将、お待ちしておりました。
蓬　お…荒俣博士。どうです？　様子は如何でしょうか？
梶谷　博士は懸命に治療しております。
蓬　では、回復の兆候はあるのですね？
婦長　ええ。まあ、何とか…。
荒俣　やぁ、蓬ちゃん、元気？
蓬　え？
梶谷　今のは別人格で、自称・テニスボーイの俊介。
蓬　テニスボーイだぁ！？

荒俣は突然品を作り、女性っぽい仕草に。

荒俣　ねぇ、そこの、あんた。
蓬　あんただと！　貴様、誰に向かって、そのような言葉を。これは、誰だ!?
梶谷　優香という名の若い女性です。

荒俣　あたしぃ、俊介の事が好きなの。
梶谷　先程のテニスボーイが好きだそうです。
荒俣　あたしぃ、実は、俊介とぉ。結婚の約束をしているの…
蓬　け、結婚するんですか!?
梶谷　テニスボーイで人格は二五人になりました。そのうち、夫婦になったのが、三組。俊介と優香が決まれば、四組目です。
蓬　重婚ではないか！
婦長　優香さん、そろそろお部屋に戻ろうか？
荒俣　ガチNG、チョーうぜぇ、ババァ。
婦長　ババァだけは、わかりました。
蓬　もう荒俣博士は結構です。こっちまで頭がおかしくなりそうだ。
婦長　もう、連れて行きなさい。
菅沼　はい！

菅沼が、荒俣を連れて行く。

蓬　特殊爆弾の製造よりも大事な事があります。
婦長　鈴木くんですね？
蓬　大丈夫でしょうね。
婦長　御安心下さい。そうでしょ？
真関　はい。
婦長　鈴木くんの調教は、ほとんど彼女が。
真関　鈴木く〜ん！
鈴木くん　は〜い！
真関　はい、こっちこっち。いい子、いい子。

まるで犬のように、鈴木君を撫で、鈴木くんも真関に懐く。

鈴木くん　くぅ〜ん、くう〜ん。
蓬　大丈夫ですか？　これで本当に大丈夫ですかぁ!?
婦長　…と思います。
真関　いい？　鈴木くん。いつもやっている事を、あの人に見せるのよ。わかってる？
鈴木くん　うん、わかってる。
真関　じゃあ、いくわよ。その1、はい！
鈴木くん　私は大日本帝国陸軍、森本松太郎と申す。

蓬　おお！
真関　よく出来ましたぁ…ハイ。
真関は鈴木くんにご褒美として、お菓子を渡した。
鈴木くん　ありがとう！
満面の笑みでお菓子を食べる鈴木くん。
頭を撫でる、真関。
真関　では、次ね。…その2、ハイ！
鈴木くん　我が、大日本帝国は現在、歴史史上最大の失敗の真っ最中でそうろう。今、和平を選ばねば、間違いなく我が帝国は滅亡の道を歩むでござろう。
蓬　素晴らしい…。
菅沼　お帰りなさい！　森本中将！
真関、またお菓子をあげて、頭を撫でている。
蓬　婦長、ありがとうございます。よくぞ、ここまで。
婦長　よく頑張ったわね。
真関　ありがとうございます！
蓬　ただ、所々、時代錯誤な言葉使いがあるのが気になります。それに、使い方も間違っています。言葉遣いは今度教えましょう。
それと、犬ではないので、お菓子もどうかと。
真関　あ…そうですね。
蓬　そこも直して下さい。
真関　はい。
蓬　主にソ連との交渉は自分が進めます。鈴木くんは要所々々で話をしてくれればいいので…。では、合図を決めましょう。私がこうしたら（腕を組む）…怒る。こうしたら（眉間を掴む）泣く。これで（手を翳して、一つ振る）笑う。
どんな言葉を言えばいいのかは、後ほど伝えます。
真関　わかりました。
蓬　あと一カ月です。よろしくお願い致します。
真関　はい！

蓬　そうだ、閣下を呼んで頂けますか？
婦長　やはり呼びますか？
蓬　お願い致します。

いつしか菅沼は戻って来ていて、
婦長、梶谷、真関、鈴木くんはその場を離れる。

蓬　鈴木くん、何とかなりそうだ。
菅沼　良かったです。
蓬　貴様、なぜ戦地には行かないのだ。
菅沼　自分は恥ずかしながら、銃が撃てないのであります。
蓬　どういうことだ。
菅沼　銃恐怖症なのであります。
蓬　なぜ、そんな…。
菅沼　子供の頃、満州で、自分の目の前で父が中国兵に撃たれて以来、撃とうと思うと身体が震えて…。
蓬　そうだったのか…。でも大丈夫だ。銃など使わぬ、平和な日本がまもなく訪れるからな。
菅沼　はい！

ぎこちなく閣下が現れる。心配そうに、婦長、真関。梶谷が後ろから。

閣下　ガハハハハ…あ、ゲホッ…頭が高〜オエッ
蓬　大丈夫ですか？
閣下　俺は生きて帰りたいんだぁ！
蓬　貴様、何を言っているのだ？
閣下　失礼しました。
蓬　閣下…、それで、今後の戦況は？

閣下は、燕尾服の胸ポケットから紙を出し、読み始める。

閣下　四月一日に、上陸した米軍は、一万四千人の・・いくさ…ぼつものを…、あ、戦没者を出しながら、くるつき…らいげつ、六月二三日には、沖・・沖・・糸へんに亀みたいな字…。
婦長は堪りかねて、閣下にだけ聞こえるほどの小さい声

で手助けをし出す。

婦長　なわ、なわ…。

閣下　沖縄：全土を制圧するのである。沖縄戦没者、一八万八千五百人。沖縄守備隊…たま…たま…。

婦長　ぎょく、ぎょく。

閣下　ぎょく…石へんに九と十。

婦長　ぎょくさい。

閣下　沖縄守備隊玉砕、以上。

婦長と梶谷、真関は、閣下の奮闘に拍手。

婦長　良く出来ました。

蓬　何が嬉しいのだ？

婦長たち　・・・・。

婦長たち、シュンとなる。
閣下も安堵の顔を見せながら、ゆっくり立ち上がり、
歩き始める。

蓬　ん？　何だ、この臭い。くさいな。

閣下　・・・・・

閣下は緊張のあまり、漏らしてしまったようだ。
お尻を手で押さえながら歩いて行く。
そこへ、大久保海軍二等兵がやってくる。

大久保　失礼します！　蓬少将！　たった今、お見えになりました！

蓬　来たか。待たせておいてくれ。

大久保　ハッ。

蓬　あいつは？

大久保　表で見掛けました。

蓬　・・・・。

蓬、一つ頷いた後、無言のまま歩き出す。
大久保と菅沼が付いて行く

◎中庭

水越が現れる。元気が無く、遠くを見て、考え事をしている。
そこへ、蓬が静かに現れる。

蓬　水越。
水越　ああ。
蓬　ここ一カ月間、元気無かったそうじゃないか。
水越　そうか？
蓬　何を考えていた？
水越　別に…。
蓬　弟のことか？
水越　…色々とな。
蓬　正和君が…どうしてもお前に逢いたいと…。
水越　・・・・・。
蓬　特別に許可を出した。
水越　！・・・・
蓬　今、ここに来てるぞ。
水越　…ほ、本当か？
蓬　おう。お前と会った後すぐに、鹿児島県鹿屋基地に向かうんだ。
水越　・・・・。
蓬　三日後に沖縄戦線に出撃するためだ。
水越　・・・・。
蓬　世間や軍内から…お前の事で彼は、どれ程蔑まれてきたか…。
それでも旅立つ前に、どうしても兄に逢いたいと…。どうしても…。

蓬、涙がこぼれ落ちそうになっていた。

水越　…蓬。
蓬　・・・・・。
水越　…ありがとう。
蓬　・・・・。

蓬は、一つ、頷いた。

蓬　大久保。

大久保が駆け込んで来る。

大久保　ハッ。

蓬　連れて来い。

大久保　承知致しました。

大久保、水越の弟、正和を連れて来る。

大久保　連れて参りました！

蓬、頷く。

蓬は気を使い、大久保を促し、二人にする。

正和は、兄に一礼し、敬礼をする。

正和　・・・。

水越　…正和。

正和　…兄さん…三日後に、鹿屋基地より、出撃する事になりました。

水越　・・・。

正和　その前に一度お会いしたく…。蓬海軍少将の御好意に甘え、参りました。

水越　・・・・・。

正和　兄さんには反対されましたが、自分は、兄さんのために出撃します。三日後…兄さんの名前を叫びながら、敵艦に突っ込みます。だから…だから…どうか兄さん…僕の分まで生きて下さい。

水越　・・・。

水越の頬に涙が伝う。

正和　…兄さんは…僕の誇りです。…今まで、色々とありがとうございました。

水越　…俺のために、死ぬんじゃない。自分のために…。今まで精一杯

生きてきた自分のために…、悔いなく散って来い。いいな…。

正和　…はい！

その時、婦長が―。

婦長　水越さん…。

水越　…はい。

婦長　これ…。

婦長が手渡した物は、あれ程強硬に没収した、水越の母の形見の財布だった。

水越がそれを受け取り―。

水越　・・・。

婦長に一礼をする。

水越　正和、最後の夜に使うんだ。あと、恋人にも何か買ってあげなさい。少ないけど、一円五十…。

財布を開き、見ると、一円五十銭しか入っているはずのない財布に五円も入っていた、それを取り出し―。

水越　五円…。

それは、婦長の御好意だった。感謝の気持ちで婦長を見ると、既にそこにはいなかった。

水越　婦長…。　正和…これ、母さんの形見だ。

正和　…兄さん。

財布を渡した正和の手を力強く握り締め―。

水越　いいか…例え短い人生でも、生きてきた事に感謝しろ。お前を叱ってくれた父さん、お前を必死に育ててくれた母さんに…感謝しろ。そして、お前が愛した恋人にも、最後に必ず逢うんだ

ぞ。こんな、しょうもない兄貴の事なんか誇りになんか思わなくていい…。だけど、俺は、お前のことは、どんな事があったって、忘れない…。

正和　兄さん…。

正和は、涙を抑えることは出来なかった。
水越、正和を強く抱き締める。ゆっくり離れ―。

水越　…行って来い。

正和　…はい。

正和、敬礼をして去ってゆく。一人残る、水越。

水越　・・・

何かが噴出するように、水越の頬に涙が零れ落ちる。
遠くで、微かに警戒警報が鳴り、無数のＢ２９の飛行機音。
焼夷弾が落ちていき、数々の爆発音。
Ｂ２９が近付いて来る。
弟を奪わんとしている敵国に怒り、上空を見上げる。

水越　おい！　守！守―！

菅沼、駆け込んで来る。

菅沼　はい！

水越　撃て！あの鬼畜共を撃て！正和を奪う、あいつらを撃ち殺せ！

菅沼　水越さん！ぼ、ぼ、僕には出来ません！撃てません！

水越　貸せ！
この野郎！Ｂ２９！米国人共！貴様ら…貴様らのせいで…
うおおおおおお！

菅沼から奪った銃で、無数のＢ２９に向かって叫びながら、乱射し続ける水越。

7　精神病院・内　（昼）

１９４５年　６月２１日　が映写される。
津田が、一人。

津田　・・・・・。

菅沼が入って来る。

菅沼　恭介さん、いいところにいた。
津田　？…。
菅沼　海軍専属の捕虜収容所から、田中秀明が脱走したと連絡が。
津田　何！？
菅沼　看守と親しくなって、近所にいる祖父に会いたいと、その看守が同行することを条件に表へ出してもらったそうです。
津田　しかし、直ぐに殺害し、武器を奪って逃走したようなんです。。
菅沼　…来る。奴は必ずここに来る。僕を殺しに。
津田　大船から徒歩で。しかも地理もわからないのに、どうやって？
菅沼　あいつは特殊部隊の人間だ。サバイバルも殺しも徹底的に訓練を受けたエキスパートだ。数週間もあれば、きっと…。
津田　・・・。
菅沼　蓬少将に伝えてくれ。敷地の外と中に警護兵を増員して欲しいと。それも、数十じゃ足りない。数百人のレベルでお願いしたい。
津田　それほどまで…。
菅沼　決して、あいつを侮るな。
津田　ええ。
菅沼　そうだ。いつも君は、その銃を持っているけど、他には所持してないのか？
津田　いえ。予備に小銃は二丁ほど。　それが、何か？
菅沼　ああ…、ほら、ヒデが侵入して来たら、君だって向かわなきゃいけないだろ。そうなったら、その銃一つじゃ…。
津田　確かに…。
菅沼　だろ？
津田　はい。じゃあ僕は、そろそろ、迎えに…。

津田　ああ。

菅沼はソ連外交官の迎えのため、玄関へと向かう。
そこへ、食後なのか、楽しげに婦長、梶谷、閣下、荒俣、
藍が入って来る。

婦長　あら、恭介くん、ご飯は？
津田　・・・いえ。僕は結構です。

津田は、自室へ戻ってゆく。

藍　元気ないですね。
閣下　ヒデくんがいなくなってから、彼は覇気がなくなりました。
藍　それを言うなら、真関さんもです。
閣下　そう言えば、何処へ行ったんでしょうね、水越さん。
藍　もう、一か月くらい見ていません。
婦長　梶さん、それでは今日の事を。
梶谷　はい…えっと、先日お話しましたが、いよいよ本日ソ連の方がいらして、和平交渉をここで致します。鈴木くん、ちょっと緊張気味なので、今からナゾナゾ大会をして、ほぐしたいと思います。但し、自信をつけさせるために鈴木くんに正解を言わせます。
婦長　これは、精神医学上重要な事なんです。
梶谷　今から、鈴木くんに答えを教えて来ます。皆さんはわざと間違いを答えて下さい。御協力をお願い致します。ちなみに一問目の答えは〈ガダルカナル島〉。二問目は〈ゼロ戦〉。三問目は〈山本五十六〉です。
婦長　では、連れて来て下さい。
梶谷　はい。

梶谷と真関、鈴木くんを迎えに行く。

閣下　婦長…今日も蓬少将は？
婦長　当然、いらっしゃいます。
閣下　最近、頻繁にいらっしゃいますけど…僕に質問しませんね。
婦長　蓬少将は、和平交渉で精一杯です。
閣下　正直、ホッとしています。

婦長　でもね閣下、蓬少将の前では気を抜かないで。ばれたら抹殺でしょ？

閣下　…そうでした。

梶谷、駆けて来て。

梶谷　来ますよ、来ますよ。

婦長　鈴木くんを拍手で迎えて下さい。

真関が駆けながら、鈴を鳴らして、鈴木くんを誘導している。

一同、拍手をする。

鈴木くん　わーい！

鈴木くん、腰掛けると、指を三つずつ折りながら―。

鈴木くん　ガダルカナル島、ゼロ戦、山本五十六、ガダルカナル…。

梶谷　では質問します。日本軍の拠点とするため、飛行場まで造った南太平洋の島の名前は？

閣下　はい。

梶谷　はい、閣下。

閣下　納豆。

梶谷　かすりもしません！他には？

真関は、鈴木君の耳元で答えを教える。

真関　ガダルカナル島、ガダルカナル島…。

鈴木くん　はい。

梶谷　はい、鈴木くん。

鈴木くん　ゼロ戦。

梶谷　・・・正解！

一同、正解じゃなくても、誉めたたえる。

そこへ、蓬がやって来る。

蓬　随分と賑やかじゃありませんか？
婦長　蓬少将、交渉のために、今、鈴木くんを盛りあげておりました。
蓬　どうですか？
婦長　鈴木くんは絶好調です。
蓬　いよいよですからね。
婦長　はい。
蓬　それと…、皆に紹介したい人が…。入れ。

水越が白い海軍の軍服を着込み現れる。全く笑顔は無い。人が変わったように厳しい表情をしている。

真関　水越さん？…水越さん！

一同、口々に驚き、喜ぶ

蓬　このたび、病癒えて、再び海軍に復帰してくれた水越少佐です。

真関、駆け寄り水越の手を握り―。

真関　良かったです。水越さん！元気でいてくれて！
水越　・・・・。

真関の言葉にも、水越は能面のように表情一つ変えなかった。

真関　・・・水越さん？

水越、真関の手を離し―。

水越　蓬海軍少将の御好意により、帝国海軍少佐として軍隊復帰致しました水越義和であります。

一同、喜ぶ。

蓬　まもなく、ソ連の外交官がお見えになります。
婦長　だけど蓬少将、本当にここで？

蓬　これは、上官も内閣もまだ誰も知らない極秘裏に行う和平工作です。誰も病院で、そんな事が行われているなんて思わないでしょう。だからこそ、ここが最善の場所なのです。

婦長　そうですか…。

蓬　そろそろ準備に取り掛かりましょうか。

真関　はい、大丈夫です！

蓬　鈴木くん…。

鈴木くん　ん？…。

蓬　まずは、頷き。

鈴木くん、蓬の頷く仕草を見て、頷く。

続いて、蓬が腕を組む。

鈴木くん　何度言ったらわかるんだ！世界平和のために和平を成立させる時が来たんだ！その為にソ連にお願いしているんだろう！。

蓬、眉間に手をやると鈴木君はすすり泣き始める。

鈴木くん　…もはや…残念ながら、今の日本には闘う余力も気力も残されていない…大和民族を滅ぼすことは…それだけは、出来ない。

蓬、手を翳して小さく振ると、鈴木くんは笑い出す。

鈴木くん　ハハハ、さすがはソ連の方だ。

蓬　素晴らしい…。

蓬、再び眉間に手を持ってゆく。

鈴木くん　何度言ったらわかるんだ！世界平…

この時、蓬、手を前にかざした。

蓬　「待て」の合図も完璧だ。

真関　ただ…これと

蓬、手を翳して、振って見せる。

鈴木くん　ワハハハ、さすがはソ連の方だ。
真関　似ているのが、ちょっと気になっています…。
蓬　そうですか、では変えますか？
真関　もう、無理です。
蓬　わかりました。自分が合図を気をつけましょう。
真関　鈴木くん、頑張るのよ。

真関、お菓子をあげる。

鈴木くん　ありがとう、頑張るよ。
蓬　まだあげてたんですか！？
真関　たまにです。全然あげないとぐずるんで…。

菅沼が入って来る。

菅沼　失礼します。今、表にお見えになりました！
蓬　え？もう来たのか。婦長、みんなを。
婦長　みんな部屋に戻って。

患者達、奥へ。
患者達がいなくなって不安になる。

鈴木くん　・・・。
蓬　さぁ、鈴木くん、こっちに。
鈴木くん　何処行っちゃったのぉ…みんな。
蓬　どうした？
真関　最近みんなで教えていたので、いないと不安に。
蓬　何て事をしてくれたんだ。　婦長、皆を呼び戻して下さい。
婦長　…はい。

婦長が慌てて奥へ。

鈴木くん　淋しいよ～。
蓬　今来るから、今来るから。

梶谷、藍、荒俣などが奥から―。
急に鈴木くんは笑顔になる。

鈴木くん　来た。
藍　頑張って、鈴木くん！
鈴木くん　オオ！

拳を高く突き上げて、鈴木くんは応えた。

蓬　菅沼、連れて来ぃ。
菅沼　ハッ！
蓬　堂々と、堂々と…。
鈴木くん　はい！
菅沼　失礼します！お見えになりました！

カバロスキー政孝が現れる。
蓬、水越、菅沼が敬礼で迎える。

政孝　蓬少将、帝国海軍指令室でお話をするのでは無かったのですか？
蓬　実は精神病院を指令室の隠れ蓑にしているのであります。
政孝　ふ～ん…。

窓の外を眺めようとすると、ニョキッと津田と閣下が顔を出す。

政孝　うわ！　な、何です？この方たちは！？
蓬　この病院の患者であります。
政孝　人がいる中、本気で交渉する気があるのですか？
蓬　この者達は何を聞いても理解しませんので、ご安心を…。
政孝　そうですか…。ああ、森本中将、大変にご無沙汰しております。
鈴木くん　・・・・・・。

椅子に座り、真正面を見たまま直立の鈴木くんに周囲は緊張する。蓬は、頷きを繰り返す。

政孝　どうされましたか？

真関、隠れるように急いで鈴木くんの後ろに来て、後頭部を押し、頭を下げさす。

政孝、不自然な真関の人影に覗き込む。

政孝　今のは？

蓬　お気になさらず…あちらが婦長の貝瀬さんに、看護婦の真関さん、医師でもある梶谷さんです。

政孝　どうも。

蓬　軍関係者以外、後は患者です。

見渡すと、荒俣博士に気付き。

政孝　あちらの方、以前、一度…。

蓬　荒俣博士ですか？

政孝　そうだ。荒俣博士。…まさか、ここの患者？

蓬　残念ながら。

政孝　優秀な方だったのに…。確か、博士とお会いした日、森本中将が御同席したかと…。そうでしたね？

ずっと、正面を向いたままの鈴木くん。蓬は、鈴木くんに頷くポーズを何度もやってみる。

政孝　森本中将？…先程から、どうされ…

政孝は蓬少将に目をやると、ちょうど鈴木くんが蓬の合図に気付き、頷いたのだ。

蓬　あ…。

政孝　どうされましたか？

蓬　今！今！うなずきました。今！　見ました？見ましたよね？

政孝　いいえ。

蓬　なんだぁ！コレ見逃しちゃあ、ダメ！二度と出来ないかもしれないんだから！

政孝　大丈夫ですか？

蓬は我に返り、急に態度を改める。

蓬　こちらは、ソビエト連邦外交官、カバロスキー…。

荒俣　カバ子ォォォォォォ！

荒俣は政孝の名前に反応し、政孝に飛んで行き、抱きつく。

政孝　な、何だ、どうした!?

菅沼が荒俣を羽交い絞めにして離す。

婦長は婦長で、カバ子ネタに反応して爆笑。

婦長　アハハハハハ！

政孝　彼女は何故、笑ってる!?

婦長　失礼しました。

政孝　おかしな人ばかりだ。

政孝、蓬、座る。水越は離れて。真関、お茶を取りに向かう。

蓬　では、早速ですが、例のお話の方を…。

政孝　私は最初ご連絡を頂いた時、日ソ不可侵条約の継続のお話かと思いました。

蓬　実は、その件も重要な事ではありますが…。

政孝　でもあれは、私共にとって、不可侵というよりも、不可思議：アハハハハハ。

蓬は、政孝のジョークに慌てて合わせて、笑う。

蓬　ハハハハハ。

蓬、合図を出す。

鈴木くん　ハハハさすがはソ連の方だ。

政孝　私のジョークを気に入って頂けたようで。
鈴木くん　・・・・・・。

蓬、咄嗟に合図を。

鈴木くん　ハハハさすがはソ連の方だ。
政孝　・・・・・・。

蓬、また合図。

鈴木くん　ハハハさすがはソ連の方だ。
政孝　何度も言われると、小馬鹿にされた気になります。
蓬　はぁ…。
政孝　あの…森本中将。

鈴木くん、真関を見ている。

鈴木くん　お菓子ちょーだい！
政孝　お菓子？
蓬　ああ、あの、そろそろ和平仲介の話を。
鈴木くん　お菓子ちょーだいよぉ。
政孝　森本中将！

鈴木くん、政孝を見る。

政孝　質問してよろしいでしょうか？
鈴木くん　質問？
政孝　はい。上官は以前、日本は最後まで闘い抜き、戦争は止めないとおっしゃっていましたが、どうしてお考えを変えたのですか？
鈴木くん　・・・・・・。

一同、ハラハラ見守る。

政孝　お答え下さい。
鈴木くん　ガダルカナル島。

政孝　はあ！？
鈴木くん　ゼロ戦、山本五十六。
政孝　ええ～!?
蓬　もういい。

蓬、咄嗟に〈待て〉の合図をするが、それを鈴木くんは勘違いする。

鈴木くん　アハハハハさすがは…
政孝　何なんだ、一体！
蓬　もういいですから、森本中将！
政孝　蓬少将、私は貴方とお話をします。
蓬　その方が宜しいかと。
政孝　戦争終結のために、米英連合軍との仲介を我がソ連にやって貰いたいと聞いておりますが…。
蓬　その通りです。
政孝　当然タダでは動きませんよ。条件があります。
蓬　心得ております。
政孝　南樺太のソ連への返還。大連におけるソ連の優先権擁護と旅順の租借。東支鉄道、満州鉄道の中ソ共同経営とソ連の優先的利益の保護。千島列島のソ連への譲渡。以上です。
蓬　千島列島まで譲渡しろと。
政孝　そうです。
蓬　せめて…せめて満州鉄道は北部のみではいけませんか？
政孝　それは飲めません。
蓬　・・・・。

蓬、考え事をして、腕を組む。

鈴木くん　何度言ったらわかるんだ！世界平和のために…。
蓬　違う違う

蓬は否定するために、手を翳して振ってしまった。

鈴木くん　アハハハハハ、さすがはソ連の方だ。
蓬　ああ・・・。

あまりの失態に、眉間に手をやり目を覆う。
それを見て、鈴木くんは泣き始める

鈴木くん　もはや残念ながら、今の日本は…。
蓬　連れて行け！　もう連れて行け！
真関たち　はい！

真関、婦長、菅沼、患者、急いで鈴木くんを連れていく。

鈴木くん　お菓子ちょうだーい！
政孝　何なんですか！？あれは！
蓬　森本中将は少々体調が芳しくないようで、カバロスキー様、この辺りで少し休憩などは如何でしょうか？奥の別室にお茶の用意をしておりますので、さあ、私がご案内致しましょう。
政孝　私は紅茶しか飲みませんよ。
蓬　かしこまりました。さぁ、こちらでございます。

蓬と水越、政孝を別室に連れて行く。
残った菅沼、荒俣が別人格になり蓬たちについて行こうとするのを止していると―、

そこへ、森本中将本人が突然現れる。

森本　菅沼！
菅沼　！……早いな。何処から出て来たの？
森本　何？
菅沼　だって今、連れて行かれただろ…。
森本　貴様、上官に向かって、なんて口の聞き方だ！
菅沼　新しい台詞だ…。
森本　ちゃんと敬礼せんか！　きをつけ！
菅沼　ま、まさか、も、森本中将でありますか？
森本　当たり前だろ！他に誰がいる！
菅沼　失礼致しました！　な、な、何故に森本中将はこちらの方に!?
森本　荒俣博士の病状はどうだ！電流で治療する装置が入ったと聞いたぞ。一刻の猶予も無くなって来たんでな。

菅沼　そうでありましたかぁ～！

菅沼は蓬に報告しようと、走って行く。

森本　おい、待て！

そこへ、婦長、真関が奥から戻って来る。

婦長　あれ？もう出て来てる！だから鍵かけとけって言ったでしょ。

森本　おお、婦長、しばらく。

婦長　何、わけの分からない事言ってんの。

森本　何がだ。

真関　そんなに怒らないで下さいよ。頑張ったんですから、いい子いい子。ねぇ～。はい、ご褒美に、お菓子。ア～ン。

森本　ア～ンじゃないだろ！

患者たち、ぞろぞろと来る。

荒俣　あれあれあれ、もう出て来ちゃってるよ。

森本　ああ、荒俣博士、貴方に会いに来たんだ。症状は？

荒俣　アドリブ言っちゃってるよ。

森本　アドリブだあ？

真関　急にしゃべり出したんですよ、鈴木くん。

森本　誰が鈴木くん。

荒俣　あんただよ。

森本　ちょっと待て。博士だからと言って、いい気になるな。貴様、何様だ！

荒俣　海の男、田吾作だ。

森本　何ぃぃ！？きをつけぇ～！歯を食いしばれぇ！

真関　はいはいはい鈴木くん、これ、これ

真関は森本に、手を振る笑う合図を送る。

森本　・・・・・。

真関　これだって、これ。

手を振る合図を連発している。

森本　何、踊っているんだ？

真関　ほら、笑って笑って。

森本　貴様、俺を馬鹿にしているのか！？

森本、真関を殴りに行こうとする。

すると、荒俣が止めに入る。

荒俣　止めろよ。

森本　ふざけるな！おい！

電流で治す装置は何処だ！こいつは治さなきゃダメだ！

森本は荒俣の首根っこを掴み、奥へ向かう。

真関　何処へ行くの？鈴木くん、ちょっと待って！

それを追う、真関。婦長が残る。そこへ、蓬、水越、菅沼が駆けつけて来る。

蓬　森本中将はどちらですか？

婦長　はあ？

菅沼　今、こちらにいらっしゃいました…。

婦長　いませんよ。何言ってるの、守くん。

奥で、ビリビリという電気音が聞こえ、森本と荒俣の叫び声がする。

真関が慌てて飛び出て来る。

真関　た、た、た、大変です！鈴木くんと荒俣博士が！

婦長　どうしたの！？

真関　二人共、感電しましたぁ～！

森本は感電して。相当な重症で、ヨロヨロとした足取りでようやく辿り着き、大袈裟に机にうつ伏せに倒れる。

婦長　随分と芝居がかっているわね。真関さん、貴方が教えたの？
真関　いいえ。
蓬　中将？…森本中将？

揺するが起きない。

蓬　菅沼、誓約書。拇印を。
菅沼　ハッ

菅沼は誓約書を出し、次にナイフを出し、森本の指を切ろうとする。

菅沼　失礼しまーす！
蓬　馬鹿か、お前は！　今押せばいいだろ！
菅沼　ハッ。

菅沼が誓約書に森本の拇印を押す。

婦長　まさか、この方…。
蓬　本物の森本中将です。

一同、驚く。
そこへ、カバロスキーが現れ。

政孝　何があったというのですか？
蓬　いえいえ何でもありません。森本中将はやはり体調が悪かったようで…。
政孝　それで、ご様子が…。
蓬　さぁ、お座りになって下さい、カバロスキーさん。条件は概ね飲みましょう。米内海軍大臣を始めとして、内閣の調整は私が責任を持ちます。最終的には御聖断を仰ぐことも考えています。そこで、口約束というのもなんですから…。誓約書に名前と拇印を頂ければ…。
政孝　本当に条件を通すのですか？
蓬　お任せ下さい。

政孝が誓約書に目を通していると、森本中将がもぞもぞと起き始める。
病院関係者たちはハラハラと見守る。

一同　！！
蓬　森本中将！
森本　森本くんでぇ～す。

感電のせいか、気が触れた様子で再度倒れ込んだ。

一同　・・・。
政孝　本格的におかしくなっていますね。
蓬　…はい。

蓬はホッとしていた。
すると、奥から正気に戻った荒俣が、周囲を見回しながらやって来る。
その姿を蓬が見つけ。

蓬　荒俣博士。
荒俣　はい。

一同、初めて主人格となった荒俣に驚く。

荒俣　蓬少将、ここは一体…。
政孝　荒俣博士。
荒俣　ソ連外交のカバロスキーさんですよね？以前一度…。
政孝　正気になられましたね。
荒俣　何の事です？
政孝　良かった…。
荒俣　あの…、一つ、お聞きしたいのですが…。
政孝　はい。何でしょうか？
荒俣　ウラン２３５を分離抽出する熱拡散分離筒、ソ連は何処まで？
政孝　…さあ、何の話だか。
荒俣　米国、ドイツ、日本、ソ連で開発を競っている原子力爆弾です。

政孝　その質問にはお答えかねます。
荒俣　貴方なら知っているはずだ。
政孝　では、逆にお聞きしても宜しいですか？
荒俣　…はい。
政孝　そのような爆弾を、日本は真剣に造るつもりですか？
荒俣　もちろん。その為に研究しているのです。
水越　荒俣博士、あとどれ位待てば、日本は製造出来るのです？
荒俣　…一カ月。
一同　！！…。

おもむろに水越は、誓約書を奪い、破く。

蓬　水越！何をするんだ！
水越　…勝てる…これで勝てる。ニューヨーク、ロサンゼルス、ハワイ…ロンドンだって、全部、爆弾落としてやる！
津田　・・・・。

高らかに笑い始める、水越。

8　二〇二〇年　取調室～一九四五年　院内・広間～院外

老人、ゆっくり歩き。窓を開ける。
街のノイズが飛び込んで来る。
外を見ている。そして、ゆっくり話し始めた。

老人　水越が誓約書を破き、カバロスキーとの仲介の話が破談になろうと、蓬少将は、あの後も和平交渉は諦めなかった。
スエーデン、スイス、バチカンなどに、秘密ルートを通じて講和を巡る交渉を行っていたのだが、どの国も無条件降伏が条件だったので、蓬も諦めざるを得なかった。
御前会議でもソ連に仲介をお願いする事が決まり、これが和平への最後の一手だったが、結局は叶わず、
蓬が目指した和平の道が完全に途絶えてしまったのだよ。
これには、蓬も絶望してな。荒俣博士の開発は、蓬にとって、いや日本にとっても最後の望みとなったんだ。

ソ連がダメになったのは、水越のせいかって？・・。
いや、ソ連は元からそんな気は全くなかったんだろう。ただ、あの時の水越の行動により、とんでもない事態を招いてしまった…。
ハワイに家族がいる津田恭介が、ハワイにも原爆を落とすという水越の発言を聞き、ある事を決意し、蓬に電話を掛けたんだ。

蓬がいる。
電話の呼び出し音が鳴る。
蓬はその電話に出る。
老人の話の続きに、蓬の声が被ってくる。

老人・蓬　どうした、急に。

津田がいる。津田の顔は泥で汚れている。
老人の話に、津田の声が被ってくる。

老人・津田　実は、ご提案があるのですが…。

老人の姿は見えなくなり、そこには蓬と津田のみとなる

蓬　貴様、その顔はどうした？泥だらけではないか。
津田　あ、いや、これは…久しぶりに、庭いじりを…。
蓬　そうか…。
津田　はい。…それで：御提案ですが…。
蓬　何だ？
津田　今は、米国に偽情報を流す絶好の機会かと思われます。
蓬　何故だ？
津田　原子爆弾をアメリカも開発中だからです。そこで、向こうに偽情報を流すのです。日本は原子爆弾を超える別の特殊爆弾を製造中だと。
蓬　そう伝えた所で、どういう効果があるのだ？
津田　それを聞き、アメリカは混乱するでしょう。向こうは必死に知りたがるはずです。そこでまた、僕が偽情報を流す。例えば、原子ではない別の元素を使い、このような製造方法で原爆以上の破

壊力があると。そうすれば彼等は、自国の原爆開発を一時止めてまで、その爆弾の研究に没頭するはずです。原子爆弾の開発を一時遅らせることが出来るかもしれません。

蓬　その間に、我が国が先に原子爆弾を造れれば、戦況は一気に逆転する。荒俣博士にかかっているな。・・しかし、あの大国をどうやって欺くのだ。安易な情報では騙されないぞ。

津田　荒俣博士は、明日、病院には？

蓬　特殊爆弾の開発で暫くは帰らないぞ。

津田　では明日、荒俣博士を病院に呼んで頂けますでしょうか？

蓬　博士に相談しようかと思います。詳しい物理学の情報がありませんと、説得力のある偽情報を米国に流せませんので…。

津田　そうだな。わかった…、私が連れて行こう。

蓬　あ、あの…先程、米国から得た情報なのですが…。

津田　何だ？

蓬　明日の午前中、日本に滞在する諜報員が、国会議事堂内で内閣の誰かを殺害するではないかと…。

津田　それは、本当か？

蓬　真意の程は定かではありませんが…、信頼出来る情報ではあるかと思います。

津田　そうか…。

蓬　荒俣博士は別の方に任せて、少将はそちらに行かれた方が…。

津田　そうだな、わかった。荒俣博士は必ず寄越すから。

蓬　ありがとうございます。

蓬は見えなくなり、津田のみになる。
津田はモールス信号を打ち始める。
すると、老人の姿が見えてくる。。

老人　日本、核兵器製造開始、核開発急ぐべし…。その打電は、蓬に提案した内容では無かったんじゃ。しかも、津田は菅沼の部屋に忍び込みんで、ある物を盗み、その後、閣下の元へ向かった。

老人の姿は見えなくなる。
閣下が入って来る。津田も後を追うように。

閣下　それで…、用件って？

津田　閣下さん、まず、これを…・

津田は風呂敷に包んだ物を渡し、閣下はそれを開けると、中には拳銃が入っていた。

閣下　こ、これは！？

津田　明日、荒俣博士が病院に訪れます。単刀直入に申しますと、これで博士を殺害して欲しいのです。

閣下　！…わ、私がそんな真似出来るわけ…

津田　これは蓬少将直々の命令なのです！いいですか、実行しなければ、貴方が殺される事に…。

閣下　な、何故、私がそんな目に？

津田　蓬少将は、貴方が正気である事を、先日知ってしまいました。今まで日本軍を欺いていた行為で罪に問われるそうです。少将曰く博士を殺せば、極刑だけは見逃してやると。

閣下　でも、この国のために爆弾を製造中の博士を、どうして蓬少将が…。

津田　実は…、博士は公安から追われている身なのです。

閣下　博士は何をしたのですか？

津田　開発した特殊爆弾の製造方法を、巨額の金で他国に売ろうとしたのです。

閣下　そんな事を…。

津田　それに、蓬少将は平和主義者で、実は、特殊爆弾の製造には反対なのです。

閣下　・・・・・。

津田　明日、博士がお見えになって、「津田君はいるか？」と、きっと僕を呼び出すはずです。それが合図です。その時、博士に向かって発砲して下さい。

津田と閣下の姿は見えなくなり、代わりに老人が見えてくる。

老人　病院裏の目立たない場所で、津田という男は穴を掘り続け、壁一つ超えるまで、さほど時間は掛からなかった。クーデターを企てて、あいつは一面焼け野原となった塀の外へ出たんだ…。

老人の姿は見えなくなる。
ヒデが現れ、周囲を警戒しながら、身を潜めるように銃口を病院の玄関へ向けた。
間違いなく、病院を訪れる公人に狙いをすましている。
すると、津田が静かに現れ、ヒデの後頭部に小銃を当てた。

ヒデ　!!…。
津田　ヒデ。
ヒデ　ようやく会えたな。
津田　俺の話を聞いてくれるか？
ヒデ　頼んでいる相手に銃を突きつけるか、普通。
津田　1ミニッツ、我慢して欲しい。
ヒデ　1分な。わかった。ほら、話せ。
津田　俺は…最初から、二重スパイをするために、米軍の指令で日本へ送り込まれた。
ヒデ　嘘つけ！
津田　本当だ！
ヒデ　・・・・。
津田　日本の味方だと思わせて、重要機密を聞き出し、米軍に送り続けていた。
ヒデ　・・・。
津田　そしてな、当初の計画から、早い時期に米兵を自分の所へ寄越すことになっていた。僕を殺害するように指示を出して。それが、君だ。
ヒデ　嘘だ！
津田　本当だよ、ヒデ。
ヒデ　何故、米軍はそんな真似をする必要があるんだ！
津田　日本軍を信用させるためだ。
ヒデ　信用？…。
津田　俺が日本に寝返って、米軍が俺を敵とみなしたとなれば、日本は完全に俺を信用する。その為に、君は来た。
ヒデ　そんな計画だと、米軍はどうして俺に言わないんだ。それに、お前も何で言わない？
津田　演技じゃ敵に見透かされるからだ。本気でお前が俺を殺しに来ないと、日本軍は信用してくれない。
ヒデ　・・・・・。

津田　ただ誤算は、その刺客が、まさかヒデだったとは…。
ヒデ　…俺は…一体、何だったんだ？
津田　ヒデはヒデで立派に任務を遂行したんだ。それで、いいじゃないか。
ヒデ　…米軍は俺を騙していた…。開戦してから、日本人というだけで白い眼で見られ、家族を守るために、米軍への忠誠心を示してきたのに…。
津田　僕だって、そうだ。
ヒデ　子供の頃から、勉強もスポーツも全部お前が上だった。親にもよく比べられた。だけど、入隊してからは、俺は特殊部隊に配属されて、ようやくお前を越えたと思っていたのに…
津田　同情するよ…。

津田はヒデの後頭部に当てた銃を向けたまま、離れていく。

ヒデ　!!…。

その隙に、咄嗟にヒデは長銃を津田に向ける。これで互角になる。

ヒデ　…恭介。
津田　銃を向けられたら、相手を殺しても構わないという命令だ。
ヒデ　・・・・・。

悔しくて頬を濡らしていたヒデの涙も止まる。
銃口を向けたまま、ゆっくりと津田は離れて行く。

ヒデ　・・・・。

お互い銃を向けたまま、津田は距離をとっていく。
ある距離まで離れると、立ち止まる。

津田　ヒデェェェェ!!
ヒデ　恭介ェェェェ!!

まるで特攻兵が敵艦へ突っ込む時の、腹の底から絞り出すような叫び声が木霊する。
一発の銃声が鳴り響く。

9　精神病院・内　（昼）

１９４５年　７月４日　が映写される。
閣下が椅子に座り、ぶるぶると震え落ち着きが無い。
少し離れた場所に藍が手紙を書いている。
菅沼は立っている。

閣下　あ…藍さん…。
藍　なぁに？
閣下　人を殺した事、ありますか？
藍　あるわけないじゃないですか。
閣下　人を殺すという事は、どういう事なんでしょう？
藍　どうしたんです？急に…。
閣下　よくないですよね、絶対。そんなこと。
藍　当たり前です。
閣下　だけど…。
藍　はい。
閣下　外に出れば、大勢の人間が殺し合っている…。
藍　そうですね…。
閣下　それが、当たり前のように…。
藍　本当に…。
閣下　戦争だったら許されるなんて、おかしくないですか？
藍　おかしいですよ。
閣下　それか、僕がおかしいのか？狂っているのか？
だから、ここにいるのか？…どっちが狂っているんでしょう？
…もう、わからない…。
藍　・・・。
閣下　こんな事をしなくてもいい時代って…来るんでしょうか？
藍　閣下…。
閣下　はい…。
藍　もうすぐ平和になる・・自由になれるかもしれないのですよ。

閣下　えっ…。
菅沼　あのう、藍さん。どうして、そんな事がわかるのですか？
藍　文通の方が、そんな事を…。
菅沼　・・・。
藍　私はね、日本は負けた方がいいと思っているの。
菅沼　止めて下さい。そのような事を言うのは。
藍　だって、もし勝ったらこの国はまた戦争を繰り返す。そうしたら、平和で自由な世界は訪れないもの。
菅沼　・・・・・。

羽音が聞こえる。

藍　あ…。

藍、窓から鳥籠を―。それを楽しそうに抱えて、鳩の足元のメッセージを取ろうとしている。
そこへ、婦長、梶谷、真関がやって来る。

婦長　あれ？　もうお昼食べたの？
藍　はい、頂きました。

婦長、ナースステーションに入り、マイクで。

婦長　お昼を食べられた方は、お薬を取りに来て下さい。

藍が最初に貰いに行く。続いて、奥から鈴木くんが貰いに来る。

婦長　貴方はどっち？
真関　鈴木くんです。ねえ。
鈴木くん　うん。僕、鈴木くん。お菓子ちょーだい。
真関　あとでね。
鈴木くん　うん。

薬を貰うと、鈴木くんは自分の部屋に帰って行く。

婦長　あれ？　津田くん見てないわね。
梶谷　そう言えば、今朝から。
婦長　何処行ったのかしら？

すると、鈴木くんと全く同じ姿の森本中将がやって来る。

婦長　貴方は森本中将ね。
森本　はい、森本中将くんです。

流石に身体に染みついている敬礼をして、様になっている。

婦長　同じ顔が二人いると困るわね。
真関　私にはわかりますよ。
婦長　さすがね。
真関　ねえ、森本中将。
森本　・・・。
真関　この通り、全く私になつきません。
婦長　軍人は硬派なのよ。

そこへ、水越が荒俣博士を連れて入って来る。

閣下　…ああ～…あ～。

いよいよ博士が現れ、閣下は息使いが荒くなり、震えだし、様子が尋常でなくなる。

荒俣　津田君はいるか？
閣下　くわぁぁぁぁぁ…

閣下は、銃を撃つきっかけに、緊張と興奮が絶頂になる。
様子の可笑しい閣下に気付き、荒俣博士は心配する。

荒俣　…大丈夫ですか？
閣下　ヒイィィィィ！

藍が、手紙を見せながら、閣下の元へ。

藍　閣下、閣下、見て下さい。これで平和になりますよ。ほら、これで自由になれるんです。

藍は、伝書鳩の足に巻いてあったメッセージを閣下見せる。

閣下、奪うようにその紙を読むと、何かが沸点に達し、タガが外れ、急におかしくなり以前の閣下に戻ってしまう。其の紙を読み上げる。

閣下　グハハハハハハ！！…一九四五年八月六日、午前八時一五分一七秒、広島に原子爆弾投下！死者二〇万人。一九四五年八月九日、午前一一時二分、長崎に原子爆弾投下！死者一二万人！これによって、日本は無条件降伏により、戦争を終結させる。グハハハハハハ！

梶谷　狂ってる…また、狂った…。

水越　原子爆弾？無条件降伏？…そんな馬鹿な話があるか!?おい貴様！そんな出鱈目、何処からの情報だ！

銃を向け、詰め寄られ、急に狼狽する藍。

藍　これは、前に…二〇二〇年からって…。

水越　そんな馬鹿な話あるか！？

菅沼　水越少佐！お止めください！

水越　黙れ！…軍を撹乱させるために虚偽の情報を流させている諜報員と連絡を取っているのではないか！

藍　ち…違います！私は、ただ、好きな人と…。

水越　嘘をつけ！

菅沼　水越少佐！震えているではありませんか！もうこれ以上は！

水越　黙れ！…さあ、言え！正直に言うんだ！言わないと撃つぞ！

菅沼　水越少佐！

真関　水越さん！

藍　わ、わ、わ、私…わ…私は…。

水越　言わないというのだな！

水越、鳥籠を持ち上げ、中に銃口を向け、鳥に発砲する。

藍　！いやあぁぁぁぁぁ！！

聞いた事もない断末魔のような叫びをあげ、発狂する、藍。
真関と婦長が藍の元へ駆け寄る。

婦長　詰め所に真行寺さんを！
真関　はい！
婦長　水越さん、やり過ぎでしょ！
水越　正直に言わない、あいつが悪いんだ。

詰め所で藍は、そこにあったハサミを使い、手首を切った。窓硝子に血飛沫が大量に飛び散る。

真関　キャァ〜！　あ、藍さんが、手首をハサミで！
菅沼　藍さん！藍さん！水越少佐ぁぁぁ！　ウアァァァァ！

水越に銃口を向けるが、目を瞑って、なかなか撃てない。

水越　米軍機すら撃てなかった貴様に、俺が撃てるのか？
菅沼　ウアァァァァァァ！
真関　水越さん！

真関は咄嗟に水越を庇い、身体で覆う。
銃声が響くと、水越を守った真関が撃たれる。

真関　水越さ…。

水越に預けた真関が、崩れ落ちる。

水越　！…ま、真関ちゃん！　し、しっかりして。なあ、真関ちゃん。
真関　…あ、いつもの水越さんだ…。
水越　真関ちゃん…。

真関　…もし…以前の水越さんに戻ってくれたら…、ご褒美に御まじないをしてあげる…、だから…。

笑顔を見せようとするが、水越の腕の中で息絶える。

水越　真関ちゃん！

そこへ、蓬が駆け込んで来る。

蓬　門番の兵士が全て撃ち殺されてるぞ！
一体何があった！　津田の虚偽情報といい、どうなってるんだ!?

閣下、蓬の顔を見て、恐れ戦く。

閣下　クウワアア…ア…ア！
蓬　どうした！？何が…

銃口を水越に向けている菅沼を見て―。

蓬　菅沼あ…貴様か！
菅沼　あ…あ…あ…。
蓬　何だ、言ってみろ！
菅沼　あ…あ…。
蓬　閣下、何があったというのです？
閣下　やります！やります！だから私を殺さないで～！
蓬少将ぉぉぉぉ！　ウアアアアア！。

荒俣に向けた、銃声が響く。博士は足を撃たれ、蹲る。

荒俣　ヒッ！
蓬　何をしてるんだ！閣下！
閣下　ごめんなさい、ごめんなさい、今、殺しますから、今！

もう一度、閣下が撃とうとすると、銃声が。
閣下が撃たれ、崩れるように倒れる。
一同の悲鳴に包まれる。

婦長　閣下 !!
水越　誰が撃った!?
蓬　誰だ？　菅沼、貴様か！？
菅沼　うわあ…あ・あ・。

気が動転している、菅沼。
すると、また銃声が。荒俣博士が撃たれた。
一同の悲鳴。婦長と梶谷も博士に寄る。

蓬　荒俣博士！…婦長！
婦長　はい！
蓬　何とかしてください！　博士は日本の最後の希望なんだ。
何とか！
梶谷　し…心臓を撃ち抜かれています。
蓬　博士〜 !!

一同、唖然。

蓬　だ、誰だ…誰だ…誰が撃った！

未だに銃口を水越に向けている菅沼。
蓬は菅沼に近付き、その銃口を持ち、自分の眉間の
辺りにに当てる。

菅沼　うああ・あ・・あ。
蓬　…撃てるか？　貴様に…。
菅沼　うああ・ああ
蓬　俺はな、何百人という特攻隊員を見送ってきた。彼等に俺は約束
したんだ。必ず俺は後を追うからと…。

蓬は、自分の指を引鉄に当て、引こうとする。

水越　蓬、早まるな！
蓬　・・・・・。
水越　死んで何になる！何百という魂のために行きなきゃ駄目なんだ。

どんなに辛くても、人生を全うしなければ、生きたくても生きることが叶わなかった命が、一つも報われないじゃないか！

蓬　……

銃口を握り締めながら泣いている。

蓬、その手を解き、ゆっくり立ち上がり、水越の方を振り返る。

蓬　水越…ありがとう…

すると、また銃声。

蓬　ウッ！

蓬、撃たれて、崩れ落ちる。

水越　蓬〜！

静まり返る―。

水越　だ、誰だ！　貴様は誰だあ〜！出て来い！

合衆国国家の鼻歌が聞こえて来る。田中秀明がゆっくり現れる。

ヒデは既に二つの銃を両手で持ち、それを向けながら現れる。

ヒデ　ただいま。

水越、菅沼、一斉にヒデに銃を向ける。ヒデも銃を二人に向ける。

ヒデ　死にたくなきゃ、引鉄を引かない方がいいぜ。

水越・菅沼　・・・・・。

すると、遠くから米軍機のプロペラ音。相当数の敵機が

いる。あちこちで爆発音。
どんどん近付いて来る。

ヒデ　来た、来た。俺が呼んだの。アメリカは俺を信用しているじゃないか！　どうだ恭介！俺は見捨てられてなんかないぞ！
アハハハハハハ！裏切り者のお前がこの病院にいると伝えたら、ほらみろ、総攻撃だ。捨てられたのは、お前の方だ！ハハハハ！

爆弾の落下音。上空真上から降って来る。
大きな爆発音で―。

エピローグ　二〇二〇年　病院跡地付近　夕方近く

蝉が鳴いている。真夏の装いだ。
老人と刑事が立っている。

老人　この辺りだ。
刑事　今は公園なんですね。
老人　あの空襲で、病院は粉々になったから…。
刑事　やっぱり、田中秀明が…。
老人　ああ、そうだ。津田が持っていたモールス信号機を奪って、アメリカに伝えたんじゃ。
刑事　そうですか。
老人　・・・。
刑事　では、そろそろ僕は…。
老人　送ってもらって、悪かったな。
刑事　あそこまで話を聞かされたら、病院の跡地に来てみたくなりますって。
老人　そうか…。
刑事　あの…どうして急に、自首なんかしようと…。
老人　…医者から、余命を宣告されたんだ…。だから…。
刑事　そうなんですか…。
老人　本当に、私は裁かれなくていいのか？
刑事　だって、どの人かもわからないのに…。万一殺人に関与をしてい

たとしても、とっくに時効です。
老人　七五年も経ってりゃあ、そうか・・。
刑事　それに、戦争中は、みんながみんな、殺し合っていた。そんな中、何を裁けばいいのですか？
老人　そうだな…。
刑事　あの戦争は、一体何だったんでしょうね？
老人　日本が強くならざるをえなかったのは、白人たちがアジアを支配し始めたからだ。あの戦争のおかげで、アジアの白人による植民地支配は全て解放された。日本は戦争に負けても、目的は達成できたという人もいる。だけどな…
刑事　・・・・・。
老人　どんな理由であれ、血を流し合っちゃいかん。

刑事は一つ頷いた。

老人　君ら警察は、拳銃を持っている。これは、平和でいられるための抑止力だろ？
刑事　ええ…まあ…。
老人　じゃあ、原子爆弾はいいのか？
刑事　・・・・・。
老人　例えば、この公園に一人悪人がいるからと、罪なき人を巻き込んで、全員銃で撃ち殺してもいいと思うか？
刑事　それは、論外です。
老人　だけど、戦争では、それが平然と行われる。正義を振りかざした…これは、狂気だ。
刑事　・・・・・。
老人　すまんな。
刑事　いえ…。
老人　大丈夫か？　もう、仕事だろ？
刑事　あ、はい。
老人　これ以上、引き留めちゃいけないな。
刑事　貴重なお話を、ありがとうございました。
老人　また、会えたらいいな。
刑事　はい。
老人　またな。
刑事　失礼致します。

老人、一人残り、ゆっくりと周囲を見回し、病院のある方向へ、敬礼をする。
すると、一人の若い美しい女性が、花を携えて歩いて来る。実は、藍の孫である。
その胸には赤いブローチが…。老人、それを見てー。

老人　！・・・・。

老人と交差する、女性。

老人　あの、すみません…。

藍の孫はゆっくり振り返る。

藍の孫　…。
老人　その、ブローチ…。
藍の孫　これですか？
老人　ええ。
藍の孫　祖母から貰ったものです。
老人　もしや、真行寺愛さん？
藍の孫　…祖母を御存知なのですか？
老人　…ああ…お孫さんですか？
藍の孫　…はい。
老人　では、藍さんは、あの時、助かったのですね？
藍の孫　空襲のあった日…？
老人　そうです。
藍の孫　崩れた建物の隙間で気を失っていて、数日経ってから救助されたと聞いております。
老人　良かった、信じられない。…私も気付いたら、軍の施設に運ばれていた。
藍の孫　失礼ですが、あの時、病院にいらっしゃった方でしょうか？
老人　ええ…病院付きの軍人でした…菅沼守と申します。
藍の孫　あ！菅沼守さん！…よく祖母が守さんのお話をしていたと、母から…。祖母も母も、守さんは、お亡くなりになったと思っていました。　それで祖母は、ずっとこれを…。

老人　それは、私が造った…。
藍の孫　そう聞いています。祖母が母に譲り、それを今、私が…。
老人　・・・。
藍の孫　七五年前の今日ですよね？
老人　そうです。空襲があったのは…。
藍の孫　一度、祖母の思い出の場所に来てみたくて…。
老人　それで、お花を？
藍の孫　はい。祖母と母の代りに…。
老人　・・・・・。

藍の孫は、ゆっくり花を地面に置き、手を合わせる。
おもむろに、老人に向きなおり、バックから名刺を出し、渡す。

藍の孫　今度、ご連絡を下さい。一度、ぜひ祖母に御線香をあげに…。
老人　はい。ありがとうございます。
藍の孫　…失礼いたします。

藍の孫を見送る老人。蝉の声が一際大きく聞こえる。

老人　・・・・・。

遠くを見ている。
ハオトが遠くから聞こえる。どうやら、老人の背中越しに降り立ったようだ。見ると、白い鳩だった。足元にはメッセージが巻かれている。それを外し、開いてみる。
老人は驚き、そして、涙が溢れ始めた。
その便りに書いてある言葉をゆっくり読み始めたのだ。

老人　…誰か、私を見つけて下さい…。

老人、空を見上げ、目を閉じ、何とも言えない表情で微笑んだ。
涙でぼやけた老人の瞳には、真っ白い伝書鳩が、真っ青の大空に自由に羽ばたいてゆく様が映っているだろう。
平和の祈りを込めて・・・。

完